

---

# ”え”から始まる物語

ビビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

”え”から始まる物語

### 【Nコード】

N3424I

### 【作者名】

ビビ

### 【あらすじ】

最強の称号であるSランクを持つ魔王すら倒した戦士カシムは悲しいことに彼女が一度もできたことがなかった。ゆえに、彼は決意する。女風呂を覗くと。これは戦士カシムの女子風呂覗きファンタジーである。

## 序章（前書き）

これはとある公募の投稿予定の作品です。

オカシイところがあるぞ、ここはこうしたほうがいい、などなどのアドバイスをいただけただけなら幸いです。

重箱の隅をつつくような酷評お待ちしております。

## 序章

「カシム お前本気か？正気か？」

背後からデルブライトは俺にそう問いかけてくる。  
もちろん正気に決まっているだろう。

「ブルツシュリウムの秘湯に行くなんて狂気の沙汰だ。やめておけ！死ぬぞ！」

死ぬ？俺が？そんなことは百も承知だ。

マントをたなびかせながら俺はキリツとした表情を作り上げて意味深に言う。

「デル お前はわかっていない。なんで俺がブルツシュリウムに行くのかを理解していない」

「理解？理解だと？できるわけがないだろう！あそこの防御を知っているか？完全に男子禁制なんだぞ！周囲は隔絶された掘りに覆われている。その掘りの深さは実に百メートルを超える！何よりだ！その掘りの周囲にすらAクラスの魔獣ばかりが生息しているんだぞ！成功した奴は一人もいないんだぞ！」

ああ、そうだな。掘りは確かに百メートルという情報がある。先に旅立った勇者たちの遺言だから間違いないだろう。もろもろの情報には既に出払っている。魔獣大百科のブルツシュリウムの秘湯に生息する魔獣を見るととても凶悪な魔獣ばかりだ。ケルベロス、ミノタウロス、オーガ、メフィズスウィッチietcといった伝説級の魔獣ばかりだ。

だが、それがどうしたというのだろうか？

成功した奴がいらない？なら俺が初めの一人になればいい。俺こそが成功者になればいい！

「デル お前はわかっていない！俺が何故そこに行くのかを全くと言っていいほど理解していない！」

だからこそ、この愚かにも愛すべき友人に俺は言わなければならぬのだらう。

「目の前に秘湯があれば覗く。なんとしても　なんとしてもだ！まさにそこは美女の聖域。命を懸ける価値がある」

美人になることが生まれたときから確定されているエルフたちの肉体、貴族たちの貞淑にもたわわに育った魅力的な肉体、天使たちのけしからんまでに神々しい肉体、悪魔たちの男を魅了するために生まれたかのような肉体　想像しただけで鼻血が出る。命を懸けるには十二分だ！

「お前　それほどの覚悟だったのか」

デルブライトはよほど感銘を受けたのだらう。俺の肩を強く強く掴むと涙ながらに俺を見た。

「お前の覚悟は確かに理解した。受け取れ」

そう言ってデルブライトは詠唱する。『我と契約を交した魔剣よ。今こそ顕現せよっ！』と。

空間に突如出現したのは禍々しいオーラを放つ一振りの大剣。俺の持つ鋼の剣とは雲泥の差であることが見ただけで理解することが

できる。

「偉大なる我が父の残した一振り　【魔剣カイゼル・フォルヴァー】だ。銘入りの魔剣。必ずお前の役に立とう」

【魔剣カイゼル・フォルヴァー】　銘入りの魔剣。世界中の剣士たちが涎を垂らして欲しがるものの一つだ。この剣のためなら命すら払うという者など腐るほどいる。

「だが、これは形見だろう？」

そんな奴らの中にデルブライトの父がいた。命を支払ってまで契約した魔剣。結局は魔法使いであるデルブライトに渡ったわけだが。

「俺とお前の仲だろ……？お前の進む道には男の浪漫がある。俺に止められるものかよ。止めてなるものかよ。お前はお前の道を貫け」

デルブライト　ッ！

「　　すまんっ！」

「ああ、行けよ。決して立ち止まるんじゃねえぞ。その先にはきつと栄光がある」

鋼の剣を空高く放り上げる。

そして今手に入れたばかりの魔剣を腰溜めに構えて　振り上げる。

振り上げた先にあった鋼の剣は叩き斬られた。さらば相棒、ようこそ相棒。さあ、険しい旅の始まりだ。

ザッ、と砂を鳴らして前を向く。友の意志は確かに受け取った。

「任せておけ。我が道を阻む者は須らく踏み潰す！」

目の前に広がる森はまさに魔界。その先にある秘湯はまさに天界。必ずや辿り着いて見せよう。

「行くぜ、親友」

「ああ、行ってこい」

サムズアップ　これが男の別れに相応しい。

## 1 - 1 事の発端

思い出すことは前日のこと。それが全ての始まりだった。

俺の住まう街は聖ブリュナーゲル城砦都市。

貧富の差が激しく、中心にいけばいくほど金持ちになるといっわりやすい構成の都市だ。

外周部の門の周辺以外は廃墟のような建物ばかりで、治安は劣悪と言っている。

いや、今はそんな話はどうでもいいな。とりあえず俺が住んでいる場所は外周部の門付近だ。

門の近くにはギルドというものがある。冒険者 要するに俺のようならず者から王国に所属していたという経歴を持つ元騎士たちが仕事を請けるための仲介所だ。

木造の1階建ての家。造りとしてはほとんど酒場に近い。入り口の近くにはゴロツキがたむろするテーブルたち、カウンターの奥では無愛想なおっさんがグラスを磨いている。酒場と違ふところと言えば酔っ払いがいないことだろう。ここは水と果物のジュースとミルクしか出さない。

俺も良い仕事がないか、とゴロツキたちの座っていないテーブルを独占して依頼書のリストを眺めていたときだった。

隣からとても能天気なをあげながら俺に話しかけてきた女がいたのだ。

「やほやほ、お元気？ 私は元気！理由知りたいよね？ もちろん知りたいよね！」

と無駄に元気を撒き散らしながら嬉しさを態度と言葉で表そうと必死なリーフが現れた。金髪碧眼の大きな瞳がチャーミングポイントの僧侶だ。ちなみに俺のパーティメンバーの一人である。胸元が少し残念ではあるが、それなりに整った顔立ちと華奢な身体がナイスな女の子である。

いつも元気で五月蠅いくらいだが、今日はさらに姦しい。こいつの場合三人揃わなくても五月蠅いのでこの女が三人集まったと想像した瞬間耳栓を購入することを真剣に検討せねばなるまい。

とりあえず嬉しい理由を聞いてほしいオーラをふんだんに放出しまくっているの聞いてやるしかないだろう。なんか聞かないと後がうるさそうだし。

「どうしたんだ？」

そう聞くと「待つてました！」と言わんばかりに表情を輝かせる。ぶんぶんは無駄に体力を使うボディランゲージを駆使しながら俺に嬉しさを伝えようとリーフは奮闘し始めた。

「私ブルツシユリウムに行くんだ！」

ブルツシユリウム 要するにAクラス魔獣の住まう森だ。ここにいる魔獣討伐は定期的に大人数で行われるが、今年は討伐が終わったばかりなので依頼はなかったはず。

「あのね！やつと順番が来たんだよ！ブルツシユリウムの秘湯ね！本当長かったよ！半年待ちだよ？しかもね。今回は特別ケースらしいんだ！あらゆる種族の女の子たちが集うらしいんだよ！いやあ、私も人間代表としてね？うん、それなりに美人だからって選ばれちゃったんだよ。ふふ、やったね！」

待て、なんだと　それは……！

「ブルツシユリウムの秘湯に行くということか？」

「うん、いやいや楽しみだよ。しかも、いろんな種族が来るんだよ？！楽しみだなあ。天使の羽とか触れるかな。いやいや、悪魔の羽も捨てがたいねえ。楽しみ楽しみ！」

そんな風に楽しそうにしているリーフなどどうでもいい。

ブルツシユリウムの秘湯　そこは選ばれた者しか入れないという傲慢極まりない温泉だ。

経営している者は女王直属の温泉経営機関　通称【ホットホツト・スプリングス】。ふざけた名前の通りに本当にふざけた奴らだ。絶対に美人しか入浴させない、という理念がありブルツシユリウムは特にその傾向が顕著なのだ。種族関係なしの美人図鑑、と美女ハンターたちには言われている。ちなみに美女ハンターとは未開の地にある未だに発見されていない種族の中でも特に美しい女性を嫁にすることを目的にしている変人たちだ。

いや、そんなことはどうでもいい。今回はリーフが入るという。まあリーフに興味はない。感情の起伏は激しいが、身体の起伏はあまりよろしくない。

ちらりと胸元を覗いてみた。ため息が出る。

「何よ」

俺の反応に気づいたのだろう。剣呑な響きを持つ声が返ってきた。

「いや、別に」

スルーすべきだろう。僧侶と見せかけて何気に喧嘩っ早いんだコ

イツは。

「で、秘湯ツアーはいつ開かれるんだよ？」

「んお？明日にブリュナーゲル中心地だって。貴族主催みたいだからねえ。あ、一応女の人だよ？」

そんなことくらいわかっている。ブルツシユリウムの秘湯は王族ですら男だと入れない。経営者も主催者もちろん女性だろう。

噂では主催者はその毛がある人たちらしい。リーフは まあ大丈夫だろう。大丈夫じゃなかったら笑ってやろう。

さて、今問題なのは秘湯ツアーの日時が完全に把握できたということだ。

つまり、行けば確実に女がいる。しかも、魔獣討伐が先日なされたばかりだ。今なら比較的容易に覗くことができるだろう。比較的 というのは便利な言葉だ。不可能から無謀に変わったただけなのだから。どのみち死と隣り合わせだ。

「というわけでね。今から私はお洒落な温泉グッズを買いに行くので〜す！」

俺の思考を今リーフに読まれるわけにはいかない。きつと変態扱いされてしまう。俺は一応真人間なのだ。ただ浪漫に準じることに抵抗がないだけだ。

それにしても お洒落な温泉グッズ？聞いたことがないな。

「可愛らしいストロベリー柄のバスタオルに、オレンジの香りのするシャンプーなどを」

何故別々にする必要がある。

「そこは統一しようぜ？な？」

「まあそんなわけで私はパーティーに参加できないから、そこんところヨロシクう！」

「おう、俺もちょうど明日はオフにしようと思ったところだし、不参加でも構わないぜ」

全く問題ない。

明日の仕事は俺一人で遂行する。

「予定でもできたの？」

ああもちろんだ。

「予定というより確定だな。まあ、お前には関係ねえよ」

そう言っただけ俺は早速準備にとりかかるためにギルドを出た。

変なヤツう、というリーフの言葉が聞こえたが、どうでもいい。

今は何よりも優先すべきことがある。

ギルドを出たらすぐそこは大通りに面している。東西南北に大通りがあり、中央で交差している。この通りでは露天商が元気に商売しており、いつも喧騒で満ち溢れている。

人ゴミの中では色んな人種があり、エルフ、ドワーフ、普通の人間、たまにリザードマンも闊歩している。他の街ではあまりない光景だが、聖ブリュナーゲル城砦都市はどんな種族でも平等に入れる都市だ。城砦都市であると同時に交易都市でもあるのでそれが主な理由だろう。やはり色んな種族の色んな技術や特産品が行き交うほうが儲けは増える。それに異種族を見るために観光に来る人たちも

やはりいる。今日も今日とて聖ブリュナーゲルは栄えていた。

そんな栄えている聖ブリュナーゲルと反して一步路地裏に入り込むとまるで別世界に来たかのように錯覚してしまう。

この都市は見えるところは本当に綺麗なのだが、見えないところは汚いのだ。特に外周部は顕著である。薄汚れた路地にはゴミが散らばっていて壁には掠れて読めない文字が散りばめられたポスターが貼り付けてある。

路地裏に入って進んでいくとそこはスラム街だ。俺の生まれ育った場所である。既に住んでいる場所は違うが、今でも出入りするところはある。アジトにするにはうってつけの場所なのだ。

生気のないガキがうるつくスラムを通り過ぎていく。大人たちは物陰からじつと俺を見詰めているようだ。警戒しているのかね。

まあ警戒されようとあまり興味はない。俺の目的地はここではない。

少し歩いていったところに目的の一軒家があった。このスラムの中では比較的マシな部類に入るだろう。何せ壁に穴があいてないし屋根にも穴があいていない。よほど安値で売らないと売れそうになり物件だが、それでも雨風凌ぐくらの役割は全うする。

ここが俺の目的の場所だった。コンコンと木製の扉を叩く。

「新聞の押し売りならお断りだよ」

扉の奥から聞こえたものは子供特有の高い声音。

「おいおい、こんなところにセールスに来るかよ。俺だ。カシムだ」

「カシムう？ん、何か用かい？」

扉を開けて出てきたのは白いローブを着込んだ小さな女の子だ。

黒髪黒眼のこの大陸の生まれではないということが確信できる容貌。

何か不思議な魅力に満ち溢れている。とにかく可愛らしいのだ。

今回はその可愛さを十分に堪能していただける余裕がないのが残念だ。今日は明確に用事があったて来たのだから。

「ああ、情報でな」

言うなりピクリとミオは反応する。女の子の表情から商売人への表情に切り替わった。するりと後ろに引いて俺を手招きする。中に入れということだろう。

「今日は友としてではなく、客として来たわけだね。ようこそ、【暴虐の使徒】へ。どんな機密でも値段次第で売らせてもらうよ」

ここらで最も実力のある情報屋　それがミオだ。年齢に関係なく、どこから仕入れてくるのかわからないが、結構重要な機密を取り扱っている。以前何度もその情報で助けられたことがある。

部屋の中には向かい合わせにあるソファ、その間にあるテーブルが置かれている。奥のほうにはいろいろな資料が詰め込まれた棚が敷き詰められている。いつもはその中に書き込まれた情報を欲しくて来るのだが、今日はそういう用事ではない。

ミオがソファに座るとどうぞ、と俺に手を向ける。用件を言え、ということだろう。

「今日は情報を買いに来たわけじゃねーんだ。売りに来させてもらった」

ソファにもたれ掛かるように座り込みながら俺は言った。腰に差した剣が邪魔なのでソファの横に立てかけておく。

「君が売りに来るなんて珍しいね？」

だろうな。初めてなんじゃないか、と思う。俺はそういう情報の類での絡め手は苦手だからな。しかし、今回ばかりはそうも言ってもらえない。

「ああ、今回は売りに来たというよりこの情報を流して欲しい」

「へえ？参考までに聞いておくよ」

「ブルツシユリウムの秘湯の開催日がわかった。しかも、今回は貴族主催のあらゆる種族の美人が集う会らしい」

この情報を流しに来たのだ。俺の目的のために。野望のために。

「へえ、少し興味あるね」

予想通り興味を示してくれた。

「流してくれるか？」

「内容次第だろうけど、まあ流すことになるだろうね」

だろうな。俺が情報屋でもこの情報は流すだろう。こんな極上の情報は誰でもというわけではないが、真の漢なら欲しがるはずだ。

「俺のパーティーに所属してるリーフを知ってるか？」

「ああ、よく君が胸さえあればなあ、とぼやく僧侶の女の子だね。知ってるよ」

「それだけ知ってくれてれば十分だ。で、そいつが今回のブルツシユリウムの参加者に選ばれたらしい」

すう、と息継ぎをする。大事なのはここからだ。

「で、だ。今は時期的に最高だ。何故なら魔獣討伐がされたばかりだからだ」

ここでミオが反応する。

「討伐と言っても間引きみたいなものでしょ？ブルツシユリウムの秘湯を守るための数の残しておくためのさ。増えすぎたら近隣の町が危ないもんね」

確かにそうだ。あれは間引きというものだ。

【ホットホット・スプリングス】が管理できるだけの数になるまで魔獣を討伐する。

「そうなんだけどな。まさか討伐したばかりの時に主催されるとは思ってたなかったぜ。やっとチャンス到来だ」

「チャンスって？」

おいおい、わかってんだろ？

「覗くに決まってるだろ　ッ！」

ぼかーん、という擬音がこれほど相応しい表情はないだろう。商売人の顔だったミオが素で驚きの表情をしている。そこまで予想外か？

しまった、と呟いてゴホンゴホンと誤魔化すように咳をする。そしてチラチラと俺を見ながらハア、とため息。どういう意味だ？

「あーうん、まあ君がそういう奴だったのはボクも知ってるよ？でもね、知人として言わせてもらっていいかな？」

なんだ。さっきまでの動作と関係することか？

「ああ、何なりと言ってくれ」

「君、馬鹿だろ？」

失礼な。

「馬鹿じゃない。自分に正直なだけだ」

「似たようなものだと思うけど、で、情報を流してどうするの？」

察しの良いミオのことだ。きっとわかっているはずだろう。俺の目的を。

それでも確認してくるといふことはおそらくその予想が自分の意図通りでないことを望んでしているといふことだ。

「わかってるだろ？」

だから俺は言ってやる。お前の考え通りで合っているぞ。

「わかるけど。美人ハンターたちに流したいんでしょう？この情報を」

「ああ、人数は多ければ多いほどいい。組む組まないではなく、敵

の目を分散させるためにな」

一人で特攻して踏破できるはずもない。何せブルツシユリウムだ。あそこは本来なら五十人くらいのパーティーを編成して挑むものだ。少なくとも魔獣討伐のときはそうだった。それほどに危険な場所なのだ。死傷者も出たしな。

けれど今回は一人で行く。なればこそ、危険度は少しでも下げられるべきだ。

心底呆れた表情でミオは俺を見てくる。ジエスチャーでやれやれとしている。言いたいことはわかるがな。

「敵って　まあ君からしたら敵なんだろうけど。あそこは恐ろしいくらいにマニアックな防御壁だからねえ。裏はとってないからわからないけど、天使や悪魔たちの手助けもあってあの環境を作り上げたらしいよ」

それくらいは知っている。だからこそだろう。

「踏破ランク　S。なかなかの高難易度だぜ」

つまり未だに踏破した者がいないということ。

「君さ。一応ランクSの戦士なんだからそんな馬鹿なことに全精力を傾けてないで真つ当な仕事をしなよ。聞いてるよ？前なんか西の魔王として君臨していた炎帝バルギルスを倒したみたいじゃないか」

一応俺はSランクの称号を頂いている戦士だ。仕事をすればかなりの額を要求できる。

ミオの言う通り俺は西の魔王を討伐した。依頼があったからだ。おかげで今はお金に困っていない。だから真つ当に仕事をする意味

はない。さきほどは暇つぶしのために仕事を探してはいたが、今は暇ではない。忙しい。仕事なんてやってられるか！

それにだ。魔王倒しは苦勞したわりには、死に掛けたわりには、全く割りの合わないものだった。

「倒したからどうなったって言うんだ？」

「ん、まあ治安が良くなる　かな？」

「ああ、まあ確かに治安は良くなったな。でも　」

ここからがとても重要だ。耳をかつぽじって聞けよミオ！

「俺はモテなかった。彼女ができなかった。女にアピールするため頑張ったのに！せめて女風呂くらい覗くくらいのご褒美はあってもいいだろ?!」

そう、俺は名声のためにも戦ったのだ。

おかげで魔王殺しとも言われるようになった。だけどだ。彼女はできない。何故だ?!俺は頑張ったのに！俺は努力したのに！なんで俺は報われない！なんで俺に恋しない?!

「き、君って奴は　それなりに顔もいいし強いんだからさ。彼女くらいすぐできるだろ？その性格さえ治せばさ」

顔もいいし強い？ありがとう。そう言ってくれるのはお前だけさ。ミオ。

んで、性格治せと言うのはお前だけではない。言われるたびに俺は胸を張って言ってやるのだ。

「この性格は俺の誇りだ」

変える予定は一切ない。

「変わってるよね」

「よく言われる。で、頼まれてくれるか？」

「まあいいよ。君からの頼みだし。それに儲かりそうだしね。で、これだけじゃないんでしょ？」

もちろんだ。これだけなら自分でも出来る。  
ここからが本題だ。

「ああ、お前にできるかどうかはわからんが秘湯の参加者をリストアップしてくれ。早急にだ」

「できるけど　なんでそんなものいるの？」

何を言っているんだ。コイツは。そんなの決まっているだろう？

「イメージトレーニングのためだ」

さらに俺は胸を張って言ってやった。

ええ?!と驚愕に彩られている。何故だ?本気でわかっていなかっただのか?

「何をイメージするの?!」

イメージと言えば一つしかないだろ……。

「見るアングルとかがいるだろう。あと女体の神秘が垣間見えても気絶しないようにだ。俺にはあまりに眩しすぎる。そのためにはイメトレが必要だ！」

自慢じゃないが俺は未だに手を繋いだことすらない。その俺が裸を見る？妄想しただけで鼻血が出るのに現物を見てしまったら気を失ってしまう。

その対策のために今のうちに経験値を上げてレベルアップしておかなければならないだろう。聖域は長い間見ていたい。

ハア、と何度目かわからないほどの回数ため息をしているミオが更に深いため息を漏らした。そして俺のほうを上目遣いで見てくる。

「君って結構初心だよな。何ならボクが相手してあげようか？」

「ニマア、と顔をいやらしく歪めながらミオは俺に言ってくる。マジで?!」

「ほ、本当か?!」

思わずソファから跳ね起きてミオの手を取る。そのままいつでも臨戦できるように心の準備をする。大丈夫だ。本で得た俺の経験はきつと本番でも活かせることができるはず　ッ！

「く、喰いつかないでよっ！どれだけ飢えているんだよっ！冗談に決まってるだろ！」

じよ、冗談なの……?そんな殺生な。

本気で喜んでいた俺はかなり落ち込んでしまう。と、同時に初めて女の子の手に触れたことを少しばかり喜びながらソファに座る。

「す、すまん。つい」

とりあえず謝っておく。発作的にやった。反省はしていない。

「はあ、まあいいよ。情報のことは任せておいてよ」

「頼んだぜ」

この都市で有数の情報屋が任せろ、と言っただ。この件はこれで大丈夫だろう。

先ほどの醜態をなかったかのように俺は爽やかボイスを意識して答えてみた。

「無駄に格好良い声音で言わないでよ。悲しくなってくる」

誤魔化せないですね。

「あ、はい」

俺は頂垂れるしかなかった。

## 1 - 2 意見の相違

俺は聖ブリュナーゲル城砦都市の東に1kmほどの場所にいた。そこは神祖の森と言われている。神の住まうと言われる場所。神域というのだろうか。

小さな時から修行をするときはいつもこの場所だった。鬱蒼と茂る木々の木漏れ日は実に気持ち良い。森の間を駆け抜けるそよ風が頬に当たって気持ちいい。

しかし、今そんな余裕はない。森の中にある滝の下で座禅を組んで水に打たれて精神を高める。異邦人はこれを“禅”と呼ぶが、俺にとってはそういうものではない。ただ精神を高めるだけの修行だ。

俺も少しくらいは魔法を使うことができる。【浮遊】レヴィテーションの魔法を使ってミオから手に入れたリストブックを目の前に浮かべている。ペラペラと自動で捲られていくページたち。詳細な情報がぎっしりと詰っている。スリーサイズと顔のイラスト。見ているだけで下腹部が漲ってくる。

むらむらとした煩惱が俺を攻め立てる。つう、と鼻の穴から血液が流れ出る。だが、ここで気を失うわけにはいかない。この程度で気を失っては俺が俺じゃなくなる。俺の夢が達成できなくなる。だが、そんな俺でも限界が来る。イラストつきだと思っただけが、特に美人だと評価されている美女たちはヌードイラストがあったのだ。おそらく想像で書いているのだろうが、あまりに美しすぎる。生々しすぎる。このような肉感たっぷりの肢体を見るには俺は若すぎる。

「　　ブハアッ！」

鼻血を迸らせながら俺は煩惱のせいで精神統一が解かれて滝の濁流に飲まれこむ。本日3回目の事故だ。

「ぐぶぶぶぶ、と半ば本気で溺れかけながらなんとか脱出する。周りの草の根が頑丈で助かった。思いつきり掴んでも引っこ抜けなかったからなんとか生き延びれた。煩惱に溺れて死ぬというのも本望ではあるが、まだ死ぬには早すぎる。」

「よお、こんなところで何してるんだ。カシム」

パンツ一丁姿の俺を訝しむように話しかけてきたのは俺のパーティーメンバーの魔法使いデルブライトだ。今日も今日とて無駄にさらさらな金髪を太陽に反射させて輝かせている。瞳は空のように澄んだ鷺色。モテそうではあるが、俺と同じく彼女いない歴〇年齢だ。俺の唯一の盟友と言っただろう。

普段着の漆黒のローブと簡易に作られた木の杖を持っていることから何かしらの仕事なのだろう。そして俺が滝に流されて溺れていたから声をかけたのだろう。

思いつきり水に濡れたせいで髪が鬱陶しいのでブルブルと身体を震わせて水気を飛ばす。「お前犬かよ」とデルブライトに突っ込まれる。犬よりは幾分か紳士だと思うが。

さっぱりとした髪をぐしゃぐしゃと掻き毟って気を整えてからデルブライトと対峙した。

「まあ、修行にな。お前こそなんでこんなところに？」

精神修行をしていたのは間違いない。

「依頼だよ。神祖の森にいる精霊たちがざわついているらしくてな。それを鎮めに来た」

「確かに 言われてみれば騒がしいな。何かあったのか？」

耳を澄ましてみれば確かに精霊たちがざわついている。不穏な空気が満ちているわけではなく、とても好奇心旺盛そうに騒いでいる感じた。言うなれば祭りの前日に楽しみで寝られなくて困っている子供のよう。

「俺たちの街もなんか騒がしいしな。それが原因だろ。妙にギルド内が殺気立ってるんだよな」

間違いなく俺のせいだ。

美女ハンターは結構多い。城砦都市は特に多くなる傾向がある。何故なら異種族の女の子とお付き合いたるために来たという人たちだっているからだ。基本的に物好きが多い。

もう情報が流れきったのか、とミオの実力に感心する。あいつはやはり俺の見込んだとおりの女だ。手も柔らかかったし、可愛いし、小さいし、いつか俺の嫁になるべきだろう。脈はなさそうだが。からかわれたし。

とりあえずまた修行に戻らなければなるまい。【レヴェイテーション浮遊】していたリストブックはゆっくりとした速度で俺の手元に吸い込まれるかのように飛んでくる。

そして俺は一足飛びで滝の麓に戻るとまた座禅を組む。目の前にはリストブック。さあ、4回目のチャレンジだ。

「なあ、もう一回聞くのもあれんだけどさ。一体何をしているんだ？」

「見てわかるだろ？」

俺は滝に打たれて座禅を組んでいる。目の前には女体広がるリストブック。容易に想像がつきそうなものだが……。

「ああ、修行つてのはわかるぜ？俺に打たれてる時のお前はだいたい修行だしな。でもよ。そんな女のイラストばっかのリスト見て何を修行してるんだ？」

ああ、だがデルブライトはわかってくれないようだ。それも仕方ない。あいつと俺では嗜好が違う。きつと俺の思考が理解できないのだろう。人とは必然的に解り合えない生き物なのだ。そのために言葉がある。少しでも解り合おうと歩み寄ることが出来る術がある。だから俺は淡々と目的を言う。至極格好良く見えるよう意識して

「無の境地に辿り着かなければならないんだ。俺の夢のためにな」

「伝説と言われる無の境地へか？明鏡止水だっけか」

明鏡止水 一点の曇りもない鏡や静止している水のように、よこしまな心がなく明るく澄みきる心を差す。これを会得すればどのような状況に陥ったとしても冷静に事に対処することができる。

つまり、これさえ会得すれば俺は女体を余すことなく見詰めることが可能だ。俺にとっての必須スキルと言えよう。何故未だに習得していなかったのかと過去の俺を口いっばい罵りたい気持ちで満ち満ちている。

「ああ、剣王ラキが生涯求めた伝説の精神状態のことだ。結局は習得できなかったようだけどな」

伝説の剣王ラキ 彼はこのスキルを会得するために生涯を懸けたらしい。だが、生涯を懸けるといえるのは実に便利な言葉だと思う。長々と時間を懸けたのだろう。俺なら一瞬で命を懸ける。そっちのほうが早い。無理なら死んだ方がマシだ。

俺が本気なのがわかるのだろう。デルブライトの纏う空気が変わ

る。

だが、同時に不思議なのだろう。リストブックをまざまざと睨みつけている。本気で理解不能のようだ。頭の上にはクエスチョンマークが浮かんで見える。

「なんでまたそんなものを会得しようとしてるんだ？というよりその女のイラストは関係あるのか？」

「ああ、ある　クツ！」

答えてやろうと思ったが、俺の精神が限界に近い。またもや鼻血を噴出した。

ガクリと前のめりに倒れて濁流に飲み込まれる。慌ててデルブライトは俺に【浮遊<sup>レヴィテーション</sup>】をかけてくれる。本当に優秀なパーティーメンバーだぜ。

「どうした？誰かからの精神攻撃か?!」

周囲を警戒しながら高等魔術である【絶唱<sup>スペルスル</sup>】を唱えて次に唱える魔法を無詠唱にして臨機応変に対処できるようにしている。魔法使いデルブライトはとても優秀だ。何せコイツもSランク。俺と一緒に魔王を討伐した奴なのだから。

「ああ、精神攻撃の類だろうな。これは効くぜ」

俺があまりにも冷静に川の上に浮遊しながら鼻の穴に指を突っ込んで鼻血のせいでできた瘡蓋を剥がしているのを見てデルブライトは混乱している。何故そこまで冷静なのだ？と。

「敵はどこだ？」

そもそも敵などいないのだ。

そう　あえて言うとするれば

「敵は俺自身の中にいる」

リストブックをチラリと見ながら俺は言う。

デルブライトも察したのだろう。【絶唱】スベルスルーを解除して臨戦態勢を解くと胡乱気な視線を俺に向けてくる。

「お前　まさか勝手に妄想して勝手に鼻血吹いてるとかじゃないよな？」

「今更気づいたのか。馬鹿め」

そう言ってやるとまるで雷撃を受けたかのようにデルブライトは硬直する。

膝から崩れ落ちて地面に這い蹲ってか細い声で苦やし草に呻いていた。

「俺はかつてないほどショックを受けているよ。馬鹿に馬鹿だと罵られるのはこれほどに辛いものだったんだな」

俺が馬鹿だと？それはありえない。俺は自分に正直なだけだ。

「甘いな。甘いぞ、デル。俺はこの奥義を会得して更なる位階へと進むのだ」

そう　俺はまた一つ大人への階段を一步進めるのだ。生まれ出でて十五年。ようやく自分の殻に閉じこもることをやめるのだ。俺

は大人になる！

「どこに行こうってんだ？というより戻って来い」

いつのまにか立ち上がっていたデルブライトはそう言うが、聞くつもりなどない。浮遊のまま空を泳いで俺はデルブライトの横で着地する。

【イクイップス武装装着】を唱えて装備を召喚して自動装着させる。ケルベロスの皮で出来た魔獣の胸当てと魔獣のパンツに魔獣の靴だ。武装は鋼の剣。いつもの装備に身を整えると俺は宣言した。

「ブルツシウムの森を踏破して 俺は女体の神秘を垣間見る」

空高く鋼の剣を掲げて俺は叫んだ。

必ずやり遂げてみせると居丈高と吼えた！

「な 命を捨てるようなものだぞ?!」

デルブライトは叫ぶが、そんなことは関係ない。

命を捨てる？何を今更と言った感じだ。死ぬような危機的状況は今までいくらでもあった。それでも俺は生きている。それに何より今回は自らのために力を振るうのだ。

「夢を見るために命を払う。当然の代価だろ」

たとえ死んだとしても俺は笑って死ぬ自信がある。夢半ばに「チクシヨウ、クソツタレ！」と罵りながらわりと満足げに逝く確信がある。

デルブライトは俺のことを理解してくれないらしい。

「お前のことは馬鹿だと思ってはいたが、それほどまでに突き抜けた馬鹿だとは思っていなかったぞ」

「フン、お前に何がわかるって言うんだ」

これ以上の話し合いは無意味だろう。

時間の無駄でしかない。俺は明日の英気を養うためにすれ違いうちにデルブライトの隣を通り抜ける。

「じゃあな。俺は明日発つ。お前と今生の別れになるやもしれん。だが、さよならとは言わないぞ。俺は必ず生きて帰るからな」

まあ、死ぬつもりはないしな。死んだとしても後悔はしないだけだ。正直死にたくはない。俺は生きて帰ってみせる。

「今すぐ帰ってこい」

だが、デルブライトはそんなことを言う。まだ旅立ってすらいなのに、背中合わせにそんなことを言ってくる。

「もう戻れるかどうか危ういぞ。お前」

戻る？俺はまだ出発すらしていない。スタートラインにすら立っていない。俺の冒険はまだ始まってはいない。

話し合いはやはり無駄だ。相互理解が不可能だ。

「どうも話が噛み合わないな。まあ、俺は明日旅に出る。またな」

これで話が終わりだという意味を込めて俺は言い放った。言葉と同時に背後からとてつもない魔力が溢れ出す。禍々しい魔

素が解き放たれる。神祖には決して似合わない邪悪な気配。それをデルブライトが放出していた。

「旅に出るといふのなら俺を倒してから行け」

幾ばくかの怒気を込めた言葉が発せられる。何故だ？

「何故お前と戦う必要がある？」

俺たちは理解はできなくても友のはずだ。盟友のはずだ！

「お前の性根を叩き直す！」

俺の性根を叩き直すだと？

意味はわからないが激しくムカツク言葉だ。

格好よく喧嘩を買ってやろう、と思ったが足に力が入らない。いつもより装備が重く感じる。ああ、間違いないな。

「ふん、いいだろう。だが、今日はダメだ」

「逃げるというのか?!」

「鼻血の出しすぎで力が入らん。お前に勝てる可能性が微塵もない」

逃げるつもりなどない。ただの貧血だ。明日になれば治っている。

「それはアンフェアだな。ならば明日　ブルツシウムの眼前にて待つ」

それでいいだろう。明日どちらが正しいか決着をつけるときがき

たよつだ。

「ああ、思えばお前と戦うのは何年ぶりだ」

思い出すのは小さな頃、毎日のように修行と称して取っ組み合いをした日々。

目指す道が違えたときから俺とお前は戦わなくなったが、それでも共に歩んできただろう。たとえ進む先が異なるとしてもお前とだけはずっと仲間だと思っていた。だけど、そうじゃないんだな。

「さあな。覚えてすらねえよ。まあ　行かせはしねえぞ、相棒」

「ハッ、言ってる。俺は俺の正義を全うする。またな、相棒」

俺はお前を倒して俺の正しさを証明する。

俺こそが正義だ！

### 1 - 3 熱き想いを拳に乗せて

俺は女の子が好きだ。

たとえ素っ気無い素振りをされたとしても、今まで手を握ったことだけが唯一の繋がりだとしても、それは唯一絶対の真実だ。

身長が高かるうが低かるうが、胸が大きかるうが小さかるうが、そんなことはどうでもいい。たとえお姉さまであろうと妹であろうと幼馴染であろうと女の子ならば俺は大歓迎だ。

妄想しただけでも鼻血が出る。一度でいいから「好きだよ」と言われてみたい。膝枕なんて最高だ。耳搔きだつてしてもらいたい。城砦都市にある自由公園のベンチでやつてもらいたい。

俺はそんなことを夢想する。たまに悲しくなるけれど、それでも止めることなどできるはずもない。

彼女のいる男を見るたびに殺意が迸る。可愛い女の子をゲットしたムサイ男を見るたびに俺の心は鬼気に満たされてしまう。

ああ、世界はきつと残酷だ。俺はきつと神に見放されているのだろう。きつとそうに違いない。力などいらなかった。ただ 彼女が欲しかった。「愛してる」と言われてみたかった。

叶わぬ夢だと知りつつも、俺は少年を止められない。夢に走ることを止められない！

そのためには友とだつて戦おう。決裂だつてしてみせよう。俺の剣は正義を貫くためにある。今貫くべき正義は俺の心の内にある。

闘志を漲らせながら紫に彩られた空の下、完全武装で足取りを確かめながら歩を進める。

目の前から差し込む登り始めたばかりの朝焼けに眼を掠めながらブルツシユリウムに辿り着いた。

かなり早くに来たと思つていたのに、敵となったデルブライトは既に待機していた。いつもの普段着ではなく、戦闘用の祝福が自動でかけられる古代文字の綴られた漆黒のローブ。杖はいつもの木の

杖ではなく、本気るときにだけ使う悪魔の骨から作られたと言われる乳白色の歪な【魔杖ダレリウス】。それらを装備しながら宙に浮かんで座り、腕を組んで眼を閉じている。

俺の気配に気づいたのだろう。【浮遊】レヴェイテーションを解除して地面に降り立つ。ブン　と横から風が叩きつけられる。俺とデルブライトの決戦に精霊が興奮しているのだろう。これほどのイベントはそうはないのだろうから。

閉じられた瞳は開かれた。鳶色の瞳で俺を睨みつけている。

「改心するつもりはないか？」

「俺はやると言った」

「どうしてもか？」

「俺が自分の言を取り下げような安い男に見えるか？」

「だろうよ、と諦め口調でデルブライトは言う。瞳を細めてコツン、と地面を杖の先で叩く。

それが決戦の合図となった。

突如俺の足元に魔方陣が出現する。さらにコツン、と杖を叩いて『閉じる』と言う。その時にはデルブライトの詠唱している魔法に気づいたが、もう遅い。魔方陣からは障壁が生まれて俺の周囲を囲っている。思いっきり剣を叩きつけるが、輝すら入らない。

「もう一度だけ聞いてやる。諦める気はないか？」

「くどいー！」

残念だ、とだけ呟くと発動のキーとなる詠唱をした。『爆ぜろ。

マグムブラスト

【爆滅】』と。魔方陣の中に地獄の業火を召喚する限定空間消滅魔法。まさに必殺の魔法だ。足元から競りあがってくる漆黒に燃え滾る溶岩が俺の周囲に満たされていく。確実に俺を殺す気だ。本気で俺を殺す気だ。だが、この程度なら問題はない。来る魔法はわかっていたのだ。対策をとるのは当然のこと。

戦士なら使うことができる単純なスキル。【闘気】<sup>オーラ</sup>を剣に纏わせ。戦士ならば一番最初に習得するスキルだ。ちなみに俺は一番これが得意だったりする。莫大なまでに俺の【闘気】<sup>オーラ</sup>を取り込んだ剣はもはやただの鋼の剣ではない。本来の性能を大幅に超えた。伝説級の武器にすら劣ることすらない。

その剣を思いっきり頭上に構える。そのときに言ってる。

「なあ、戦士だって魔法みたいな技を使うんだぜ？」

そのまま地面に剣を突き刺した！

「大地粉碎剣！」

競りあがった溶岩とともに地面は一気に爆ぜる　ッ！

俺のいた場所にはクレーターができ、その衝撃で魔方陣は決壊し、溶岩とともに挟まれた大地は衝撃の余波を逃がすために周囲の地面を隆起させる。俺が最も得意な対多数戦用のスキルだ。

もくもくと立ち上る土煙の中、敵の場所へと特攻した。

魔法使いなど接近すれば相手にならない。デルブライトの場合は近接戦闘もそれなりにこなすし、普通の魔法使いとは違い詠唱をキヤンセルしたりと魔法理論を根本から覆すようなことを造作もなくやってのけるが、それでも近づけば問題ない。俺のほうが圧倒的に分がある！

土煙を突破するために走っている。目の前からは雨のように降り注ぐ【氷の矢】<sup>アイスアロー</sup>。無詠唱でやっているのだろう。無言でひたすらに

撃ち込まれてくる。だが、問題ない。魔力を感知して全てを切り捌く。

勢いを落さずに突進する。今の俺を止めることはたとえ神であろうとも不可能だ！

土煙を突破して一気に視界が良くなる。デルブライトが魔力を高めるために精神集中している姿が見える。

「もらったっ！」

【闘気<sup>オーラ</sup>】をさらに爆発的に込めて俺は一足飛びでデルブライトに詰め寄り、剣を思い切り薙ぎ払った。死なないように加減はしたが、それでも致命傷にはるはずの一撃。あと少して切り裂ける、というところで剣は止まった。ガギン、と硬い物に当たったときに起こる金属音を奏でながら剣の軌道は止められた。

どういうことだ。剣が先に進まない。見えない障壁に阻まれて俺の刃が止められる。どうなっているんだ　ッ？！

「魔法使いになら近接戦闘を挑む。当然の帰結だ。だけどよ、考えてみるよ。そんな当たり前のことをわかってるのによ。何も対策をしないと思うか？」

そう言えば昔、魔王と闘っていたときのことだ。俺は何度もこの魔法に助けられた。危うく死に掛けるような時に、この支援を俺は確かに受けた。うっかり忘れていたぜ。【絶対防壁<sup>イージス</sup>】。あらゆる物理攻撃を跳ね返す戦士殺しの古の魔法。使える者はほとんどいない。

「クソッ！」

ギインッ、と剣を弾く。対応策はあるにはあるが、それを使うと

デルブライトの命が危うい。さすがに、それは。

「なあ、何手加減してるんだよ。お前はお前の道を貫くんだろ？俺はそのための壁だぜ？粉砕してみせろよ。俺の命なんざどうでもいいだろ？お前は今、至高の魔法使いと言われる俺と　デルブライトと闘ってるんだぜ？」

『踏み潰せ【エラフレッシュャー圧死】』と言うなり俺の頭上から空気の塊が落ちてくる。即座に飛びのいて避けるが、俺のいた場所は見事に抉られてクレーターになっている。

もうここらの土地は無茶苦茶だ。穴があき、隆起している。そうか、俺とデルブライトは戦っているんだよな。どれもこれも一撃必殺になりうる魔法をデルブライトは俺に放っているんだよな。

「さあ、出せよ。お前の本気を！お前は風呂を覗くんだと決意してるんだろ？なら、見せてみるよ！お前の覚悟を！」

いいだろう。

見せてやる。俺の本気を、俺の決意を、俺の覚悟を！必ずやブルツシユリウムの秘湯に辿り着くだろう俺の力を　お前に見せ付けてやる！

魔獣の胸当てに命令する。『覚醒しろ』と。

その瞬間、魔獣は声を上げる。ようやく解放されると言わんばかりの狂喜の叫び。これはケルベロスの毛皮を剥いで作ったものだ。本来ならば神殿で人間が装備しても精神が狂わないように浄化をしてもらうのだが、俺の場合は特別製だ。一切浄化をしていない。それは魔獣の毛皮の本来の性能を著しく損なうことになるからだ。それに、俺は不思議にも相性が良かった。精神汚染されない人間だった。

だからだろう。とても気が合うのだ。この装備とは。

眼が覚めたケルベロスは俺の身体と同化していく。ゴキゴキ、と歪な音をたてながら全身に伸ばされていく毛皮はだんだんと色艶を取り戻し、まるで生きていたかのように活き活きと脈動している。身体全身を包むのは赤黒い地獄に存在していたロード・ケルベロス。もとはケルベロスを統べる王だった。誇り高き王は俺を支配しようとして覚醒した瞬間俺の精神を喰い殺そうと反逆する。これはいつものことだ。そう、いつものことだ。

「あまりじゃれつくな　殺すぞ」

殺気とともに言葉を放つ。それだけで魔獣は俺に尻尾を振る。所詮コイツは犬だ。犬は強者に逆らわない。

ギチギチと俺の身体と一体化した鎧は俺に服従をしたときにだけ見せる付加属性をつけてくれる。力を爆発的なまでに増幅させる【<sup>バウサク</sup>狂乱】。速度を爆発的なまでに上昇させる【<sup>ヤフアヌ</sup>疾風】。下級魔法なら全て無効化する　どこるか撃ち返す【<sup>リフレク</sup>魔法反射】をかけてくれる。戦士の俺にとってはとてもありがたい。

「ああ、それでこそお前だよ。いつも思うんだけどよ。俺らってどちらかというとカオスサイドの人間だよな。世の中には光の勇者様だっているんだぜ？俺たちは決してそんなこと言われたいけどな」

「【魔獣装兵】カシム、【大魔殲滅】デルブライトか。ろくな二つ名をもらえないよな。まともなのはリーフだけか。【唯一の癒し】リーフ　それはそれでどうよ？」

紅一点だからじゃないかな、とリーフは言うが、おそらくそれだけではないだろう。俺とデルブライトの戦い方は魔に属した闘い方だ。手段を選ばず、勝つためだけの美しさのない技術。聖に属しているリーフはとにかく華がある。煌びやかな神聖魔術はただそれだ

けで人に憧れを抱かせる。美しいとは罪なものなだろう。

「ふん、まあリーフなんて今はどうでもいいか」

「ああ、どうでもいいな」

「」  
「」  
「俺たちの鬪いには関係ねえ！」

俺たちの戦いに美しさなんてなくていい。ここにいるのは無骨な男二人なのだから。言葉も何もいらぬ。

昔から決まっているのだ。男と男がわかりあうためには殴りあうしかないのだと。

俺は剣という拳を叩きつけ、デルブライトは魔法という拳を叩きつける。

戦いはまだ始まったばかりだった。

## 1 - 4 激闘の果てに

剣が振るわれるたびに大気が悲鳴をあげる。大気を切り裂き大地を抉る。斬撃の余波でブルツシユリウムの木々が薙ぎ倒されていく。それらの攻撃を　喰らえば確実に死ぬ攻撃をデルブライトは冷静に対処していく。

人を超えたことをはつきりと自覚できるほどの身体能力での苛烈な攻撃を魔法使いであるデルブライトはいなし、かわし、捌いていく。右手には氷の上級加護魔法【樹氷拳】アイシクルガントレットを纏い、左手には【魔杖ダレリウス】。左手で俺の攻撃をいなし、体捌きで攻撃を避けていく。その合間に隙あらば無詠唱の魔法を俺に放ってくる。だが、デルブライトの放つ魔法は全て【魔法反射】リフレクによって弾かれていく。

繰り返される斬撃は全て回避され、紡ぎ出される魔法は全て反射される。完全に膠着状態に陥った。

一瞬で間合いが詰められる距離で互いに睨み合う。たとえ俺が一瞬で詰めても反応できる距離。魔法が撃たれても反応できる距離。そのような間合いで俺とデルブライトは集中力を高めて隙を窺いあう。

互いに状況を打破できるものは持っているが、俺の場合は力を溜める時間が長し、デルブライトも長々とした詠唱をしなければならぬ。そんなものを撃てるほど互いに余裕などなかった。

だが、こんな展開も悪くはないのかもしれない。実力が同等の奴と戦うなんて実に久しぶりだ。いつもは適当に撫でただけで敵は倒れてしまうのに、本気で斬りかかっても全く問題ない敵がいる。これはとても幸せなことなのかもしれない。俺の実力を試せる相手がいるのは喜ばしいことなのかもしれない。それがたとえ友だとしても　いや、友だからこそか。だからこそこんなに熱くなれるのか。

「楽しいなあ！」

自然と口から流れ出てしまう言葉は嘘偽りのない本音だ。俺は楽しんでる。友との決闘を楽しんでいた。

心の底で燻っていたアツイ何かがドクンドクンと胎動している。魔王を倒して、もう敵はいなくなったのか、と思っていたのに、そのおかげでなくなっていたマグマのような感情はもう既に消えたかと思っていたのに、そんなことはなかったのか。

ああ　俺はまだ戦いたかったのか。

きつとそれはデルブライトも一緒なのだろう。周囲に古代文字を張り巡らせて至極真面目そうにこちらを観察しているコイツもそんなのだろう。顔にこびりついた表情はなにもない。だが、わかる。心の底ではきつと楽しんでいる。だってそうだろう。何年の付き合いだと思っっている。

「お前もそうだろ、なあ、おい！」

マグマの濁流を抑えきることなど俺にはできない。

相手の様子を窺うなど焦らしプレイを俺の心は容認してはくれなかった。

ただ、前へ。前へ　前へ！貫き進む！俺はお前をぶっ倒す！！グツと足を踏み込んで俺は跳んだ。空間が圧縮されていくような速度で俺はデルブライトに突進した！

右手に構えられた鋼の剣は赤く紅く燃え滾っている。俺の【闘気<sup>オーラ</sup>】を取り込んで灼熱色に輝いている。

込められた感情は“熱情”、放たれる意味は“必殺”。防御態勢を完全に整えて、【衝撃拡散<sup>ダメージフロ</sup>】、【強制解除<sup>スポイル</sup>】、【絶対防壁<sup>イージス</sup>】を多重で展開しているデルブライトに俺の放つ刃が襲い掛かる。

【衝撃拡散<sup>ダメージフロ</sup>】でまずは俺の攻撃の衝撃を削ぎ落とされて、【強制解除<sup>イージス</sup>】で俺にかけられている全ての支援魔法は一時的に解除されて、【絶対防壁<sup>イージス</sup>】で攻撃は受け止められる。だが、そんなことは関係な

い。

「う　　アアアアあああああああ！」

ギシギシと奏でてはいけない音を発しながら鋼の剣は【絶対防壁】<sup>イーゼス</sup>に食い込んでいく。戦士殺しと言われる古の魔法へ鋼の剣で喧嘩を売る。そう、戦士殺し　　ただの戦士殺しだ。

俺をそんじよそこの戦士と同じにするんじゃないやねえ！

「お前だつて知ってるだろ　　俺がただの戦士じゃないってことをよおー！」

ギチギチギチギチ、食い込む刃と反発する壁。デルブライトは至極冷静だ。さらに幾重にも【防御結界】<sup>バリアー</sup>を展開していく。心なしか、いや、間違いなくその顔は歪んでいる。

砕け散った防壁、さらに展開されている壁も俺にとっては障害にすらならない。俺は最上の【絶対防壁】<sup>イーゼス</sup>を破ったのだ。これに勝る物理防御の魔法など存在しない。少なくとも俺は知らない。

トドメだ、と言わんばかりに鋼の剣を引き絞り、上半身のバネを最大限に利用して突きを放った。避けられるはずもない。戦士の攻撃を無防備な魔法使いが避けれる道理がない。

その通りにデルブライトの身体に突き刺さった。上手く内臓をすり抜けるように喰らったらしいが、それでも致命傷には変わらないだろう。だが、どういうことだ。デルブライトは笑っている。

「グツ　　これなら俺の魔法も避けられない」

血反吐を撒き散らしながらデルブライトは言う。至極嬉しそうに笑いながらそんなことを言う。

腹に穴を空けながら、俺が力一杯引き剥がそうとするのを左手で

防ぎながら、【魔杖ダレリウス】を俺に向けてそんなことを言う  
まさか?!

『我が命を喰らいて顕現せよ。魔王の下僕。今だけは我が魔王の代  
理人! 【終焉の焰】』デットエンド

【終焉の焰】デットエンド かつて魔王を殺したときに魔王の扱った炎を羨ま  
しく思ったデルブライトが無理やり奪い取ったもの。不純物の一  
切混じらない漆黒の炎。その炎に飲み込まれたものは全て夢く散つ  
ていった。

魔王に攫われた姫を救うために挑んだ【精霊騎士】カミュ、【絶  
対正義】ジャステイル、【反逆者】アルテンド、みな強き勇者だ  
った。俺の前に魔王に挑んだ英雄たちだ。全てはこの炎に飲まれて  
死んでいったが。

みんながみんな正々堂々と挑んで倒れていった。

俺のパーティーは魔王城の周囲に1年間かけて工作し、魔獣を殲滅  
する結果を展開させて、魔王だけが残る城に攻め込んで倒した。そ  
れはヒドイ、と言われたが、所詮勝負など勝てばいいのだ。

ただ一つ残る玉座にいた魔王はとても強かった。最も苦戦したの  
がコレだ。何せ喰らえば燃え尽きてしまうのだから。それを俺に?  
コイツ 最高じゃねえかつ!

俺の身体は漆黒の焰に包まれる。熱いなんてもんじゃない。皮膚  
が焼け爛れるとかそんな生易しいものではない。消滅していく。感  
覚が消えていく。痛いと感じる余裕すらない。

状況を打破するものをお互いに持っていた。それをデルブライト  
が使った。ただ、それだけのことだ。ああ、本当にそれだけのこと  
だ。だけどよ、ここで終わるわけにはいかねーんだ。

俺はまだ何も成し遂げてはいねえ!俺の野望は止められねえ!

「ぬ あああああア!!」

雄たけびをあげてデルブライト腹に突き刺さったままの剣を引き抜く。もてる限りの力を込めて引き抜いた！

「ゲウ?!」

腹の中から飛び出す血液が俺の身体を染め上げるが全て漆黒の焔に蒸発させられる。

俺はこのままだと死んでしまうだろう。

「なあ、最後に聞くぜ？諦めたらその魔法を解除してやるぜ？どうする」

すぐそこで腹を押さえながら足をガクガクと震わせて瀕死の状態になっているデルブライトがそう言う。

あんなに魔法を連発して、あげく腹に穴をあけられて、最終的には生命力を根こそぎ奪われる魔法を行使したのだ。それも当然のことか。

そして最後に俺に温情をかける。それも当然のことなのかもしれない。俺たちは友達なのだから。だけど　それでもよ。

男には引けない時つてのがあるんだよお！

「俺が　この俺がこの程度の事で引き下がる　安い男に見えるつてのよ!」

「残念だ」

俺は絶対に諦めねえ！絶対に　絶対に女風呂を覗いてやる。ブルッシュリウムの秘湯に辿り着いてやる！

お前みたいなおきな壁、乗り越えるまでもねえ。粉碎し、通れる

穴を開けてやる！お前は俺の壁になんてさせてたまるか！

燃え尽きそうな身体に鞭を打ち、残り少ない僅かな【闘気<sup>オーラ</sup>】を全身から爆発させて【終焉の焰<sup>デスフレンダ</sup>】を一時的に解除する。

解除といっても俺自身から発せられた爆風で少しの間飛び去っただけ。だが、少しだけでいい。少しだけで十分だ。

満身創痍のデルブライトをブツ倒すには十二分だ！

「そんな馬鹿な?!」

驚愕に彩られたデルブライト。そりゃそうだろう。予想なんてできないだろう。俺だって完全に賭けだったんだからな。

だからこそ意味がある。意表をつくのは勝利の方程式での絶対的な法則だ。

焰が俺に襲い掛かろうと牙を剥きはじめる。周囲に纏わりつこうとしてくる。だが、もう遅えっ！

漲る力を剣に乗せて、振り上げた。

「お前は俺に倒される！デルブライトオオオオ！」

振り下ろされた刃はデルブライトを一閃する。ローブを切り裂き、防御しようとする前に出した腕を斬り飛ばす。

勝負は終わりを告げた。

デルブライトは腕を斬り飛ばされた激痛で意識を失ったようだ。

今は俺の目の前で前のめりに倒れている。おかげで俺に纏わりついていた炎は完全に消え去った。

「まあ、友人の命より大事なものはねえか」

ブルツシュリウムの秘湯へ行くのだ。万全の用意をしている。たとえ死者だろうと生き返らせると言われている【エリクサー霊薬】だって用意している。魔王の居城で拾った一つだけの最高級の回復薬。いざというときに使うつもりだった。

半分だけ自分で飲み、半分だけデルブライトに飲ませた。見る見るうちに傷が塞がっていく。消滅していた肉片などが全て戻ってくる。デルブライトも切り傷が全て癒え、斬り飛ばされた腕も再生していく。

じゃあな、とだけ言って俺は前へ進もうとした。そのときだ。

「カシム お前本気か？正気か？」

むくりと立ち上がったデルブライトはそう言って来る。もう気がついたのである。

「ブルツシュリウムの秘湯に行くなんて狂気の沙汰だ。やめておけ！死ぬぞ！」

死ぬ？俺が？そんなことは百も承知だ。

現に俺はお前に殺されかけても決して退かなかっただろう。俺は退くつもりなどないことをお前が一番知っているだろう。それなのにそんなことを聞いてくるなんて完全に無意味だろう？

「デル お前はわかっていない。なんで俺がブルツシュリウムに行くのかを理解していない」

「理解？理解だと？できるわけがないだろう！あそこの防御を知っているか？完全に男子禁制なんだぞ！周囲は隔絶された掘りに覆われている。その掘りの深さは実に百メートルを超える！何よりだ！その掘りの周囲にすらAクラスの魔獣ばかりが生息しているんだぞ！成功した奴は一人もいないんだぞ！」

ああ、そうだな。掘りは確かに百メートルという情報がある。先に旅立った勇者たちの遺言だから間違いないだろう。もろもろの情報には既に出払っている。魔獣大百科のブルツシユリウムの秘湯に生息する魔獣を見るととても凶悪な魔獣ばかりだ。ケルベロス、ミノタウロス、オーガ、メフィズスイッチイetcといった伝説級の魔獣ばかりだ。

だが、それがどうしたというのだろうか？

成功した奴がいない？なら俺が初めの一人になればいい。俺こそが成功者になればいい！」

「デル お前はわかっていない！俺が何故そこに行くのかを全くと言っていいほど理解していない！」

だからこそ、この愚かにも愛すべき友人に俺は言わなければならぬのだらう。

「目の前に秘湯があれば覗く。なんとしても　なんとしてもだ！まさにそこは美女の聖域。命を懸ける価値がある」

美人になることが生まれたときから確定されているエルフたちの肉体、貴族たちの貞淑にもたわわに育った魅力的な肉体、天使たちのけしからんまでに神々しい肉体、悪魔たちの男を魅了するために生まれたかのような肉体　想像しただけで鼻血が出る。命を懸け

るには十二分だ！

たとえこの身が朽ち果てようとも、少しだけでも女体の神秘を垣間見えるなら、俺の生に悔いなどない！

「お前　それほどの覚悟だったのか」

デルブライトはよほど感銘を受けたのだろう。俺の肩を強く強く掴むと涙ながらに俺を見た。

「お前の覚悟は確かに理解した。受け取れ」

そう言っただルブライトは詠唱する。『我と契約を交した魔剣よ。今こそ顕現せよ！』と。

空間に突如出現したのは禍々しいオーラを放つ一振りの大剣。俺の持つ鋼の剣とは雲泥の差であることが見ただけで理解することができる。

「偉大なる我が父の残した一振り　【魔剣カイゼル・フォルヴァー】だ。銘入りの魔剣。必ずお前の役に立とう」

【魔剣カイゼル・フォルヴァー】　銘入りの魔剣。世界中の剣士たちが涎を垂らして欲しがるものの一つだ。この剣のためなら命すら払うという者など腐るほどいる。

「だが、これは形見だろうか？」

そんな奴らの中にデルブライトの父がいた。命を支払ってまで契約した魔剣。結局は魔法使いであるデルブライトに渡ったわけだが。

「俺とお前の仲だろ……？お前の進む道には男の浪漫がある。俺に止められるものかよ。止めてなるものかよ。お前はお前の道を貫け」  
デルブライト　　ッ！

「　　すまんっ！」

「ああ、行けよ。決して立ち止まるんじゃないぞ。その先にはきつと栄光がある」

【終焉の焔】フィッシュボーンの洗礼を受けたせいで半ばから融けている鋼の剣を空高く放り上げる。

そして今手に入れたばかりの魔剣を腰溜めに構えて　　振り上げる。

振り上げた先にあつた鋼の剣は叩き斬られた。さらば相棒、ようこそ相棒。さあ、険しい旅の始まりだ。

ザッ、と砂を鳴らして前を向く。友の意志は確かに受け取った。

「任せておけ。我が道を阻む者は須らく踏み潰す！」

目の前に広がる森はまさに魔界。その先にある秘湯はまさに天界。必ずや辿り着いて見せよう。

「行くぜ、親友」

「ああ、行ってこい」

サムズアップ　　これが男の別れに相應しい。

#### 1 - 4 激闘の果てに（後書き）

とりあえず起承転結の起が終わりました。

以降は執筆中ですがここまでで変なところがあれば感想などほしいです。

特に戦闘描写が自信がないのでこうすればいいよ、などのアドバイ스가ほしいです。

お願いします（ペコリ

## 2 - 1 エンカウント

ブルツシユリウムの森の木々は実に太い。

大樹とでも言うべきか。それぞれの幹の胴回りは最低でも大人が両手を繋いで輪になって5人くらいが必要なほどの太さだ。

その理由はおそらくここに住まう魔獣のせいだろう。

あらゆるところに裂傷があり、傷跡をつけられている。ここに住まうオーガやミノタウロスたちの爪痕だ。要するに「俺の縄張りに入ってきたらどうなるかわかってるな？」という警告のようなもの。そんなものに恐れるほど俺はお人好しでもなく、臆病者でもないので堂々と歩き進んでいた。

背には友であるデルブライトから譲り受けた魔剣を背負い、防具はポロポロの魔獣の胸当て。脈動しながら徐々に再生をし始めていることからこの魔獣の胸当ては今回も生き延びたようだ。多少の怨念を胸元から感じるが、まあいいだろう。防具なんて所詮消耗品だし、雑に使われて当然だ。

腰に引っさげたポーチにはいくらかの回復アイテムが入っている。最も効き目のある【エリクサー霊薬】を使ってしまったのは痛い<sup>エリクサー</sup>が、代わりに武器が強くなったと思えばいいだろう。

【魔剣カイゼル・フォルヴァー】 属性は魔剣というだけあって魔属性。歴代の魔王でも特に強力だと言われたカイゼルの骨から造られた物だ。

あまりに強く、あまりに愚かだったことからつけられた二つ名は【愚者王】。部下である全ての魔獣や眷属を喰い殺し、その力を奪い取った 魔族からすら嫌われた異端の魔王。はるか昔のことなので詳しくは知らないが、暗黒時代と言われているほどだからよほど酷かったのだろう。

当初は魔法技術も確立されておらず、魔法は一握りの天才しか使えなかったようだ。その中で倒したとすればかなり凄いことなのだ

ろっ。

それにだ。この魔剣を見ればどれほど強かったかは想像するに容易い。

本当に強いものというものは一度見ただけでわかる。表情を見ただけでわかる。身体の作りを見ただけでわかる。むしろ肉片を見ただけでもわかってしまう。魔剣は骨でできているようだが、立派な身体の一部だ。実に凄まじい禍々しい魔素を孕んでいる。

「こんなものもらっていいのかね？」

知らず独白してしまう。

俺はあまり武器に拘らない。さきほどまで使っていた鋼の剣だってそこの武器屋で売っている代物だ。何故なら武器は消耗品だからだ。戦えば戦うほど曲がるし、錆びるし、折れていく。そのような消耗品に金をかけるなど無駄だと思えるからだ。

しかし、この魔剣を見るとなんとなくわかる気がする。さすがに命を払った者の気持ちはわからないけどな。そこまでいくと趣味の世界だろう。命を代価に得る必要のあるものなどこの世にはほとんどない。

あると言えばそう 男の浪漫くらいだろう。

いや、武器に命を懸けるのも男の浪漫なのかもしれない。まあ、俺の性分ではないけどな。

そんなことを考えていたときだ。ガギイン という金属音が耳に届いた。金属と金属が弾きあう硬質の音色。どこかで戦闘でも起こっているのだろうか。

ガギイン、ギイン と何度も聞こえる。方向からして俺の進んでいる先だろう。木々のせいで視界が悪いので肉眼で捉えることはできないが、音の発生源は間違いない。

どうすべきか、と考えながらも俺の足が止まることはない。

俺は幸運にもここまで魔獣と遭遇することはなかった。というこ

とはおそらく美女ハンターたちが魔獣の眼を惹いてくれているのだろう。囿の意味で情報を流したのだからそうなっていないと実際問題としては困る。

しかし、この魔獣は実に強い。美女ハンターたちもそれを理解してブルツシュリウムに挑んでいるのだろうが、もし、今負けていたとしたらどうする？助けられる相手が見捨てたせいで死んだらどうする？

「間違いなく後味が悪いな」

簡単に結論は出てしまった。

見知らぬところで人が死ぬのはいい。俺は正義の味方というわけでもないし、ましてや勇者ですらない。人のために自己犠牲をする精神など持ち合わせてはいない。

けれど、もしだ。もし目の前に倒れている人がいたら手助けをするくらいのことはする。善良な市民としては当然のことだ。それに冒険者同士助け合うのは至極当然のことだ。そのためにギルドに所属しているのだから。俺の場合は助ける側に回ってしまうが。より強い者が弱い者を助ける。これは絶対のルールだ。もちろん助けるという言葉の前に余裕があれば、という言葉はつくが。

現時点で俺は余裕がある。【エリクサー霊薬】のおかげで体力は充実しているし、気力も十分だ。

じゃあ行くしかないだろう。

死んでくれてるなよ、と思いつながら剣戟による舞踏会が開かれている場所に俺は全速力で駆けた。

疾走し始めてわずか三十秒ほどで目的の場所を肉眼で捉えた。

「くそっ！チクショウ！詠唱はまだかよ?!」

そんな罵詈雑言の野太い声も聞こえてくる。見えているのは鉄を神聖魔法で強化したミスリル製の全身鎧を着込んだ筋骨粒々の戦士が一人と、その後ろで魔法を早口で詠唱している群青色のローブを着込んだ魔法使いが一人だった。手には杖を持ち、コン、コン、と地面を叩いていることから必死に魔法を構築しているに違いない。

戦士のほうは全身鎧で顔のほうもヘルムで見えないので表情はわからないが、声からして焦っているのがわかる。何故なら目の前にミノタウロスがいるのだ。普通は焦る。

ミノタウロスとはよく冒険譚などで出てくるからある意味ではとても認知度の高い魔獣だ。牛のような頭を持った大男。腰掛と大斧で武装しているということくらいは辺境の村々の子供でも知っていること。

しかし、その本当の恐ろしさを知っているものはあまりいない。その強さは実にわかりやすいものだ。怪力 とにかく怪力なのだ。軽く人間の大人の2倍ほどのある身長とそれに見合うだけの巨軀。人の身体よりも大きな大斧。それらが合わさった攻撃は実にわかりやすい。その攻撃の強さを表すとすれば二文字で足りる 粉碎だ。

「ぐうっ?!」

真正面から振り下ろされた大斧を全身鎧の戦士が横あいから手に持つ大槌で叩きつけて軌道を逸らす。隣には大穴が開き、地面が爆ぜる。

爆ぜた土と衝撃の爆風で戦士は吹っ飛びそうになっているが、必

死に踏ん張って耐えている。

踏ん張っている内にミノタウロスは体勢を立て直し、再度戦士に肉薄する。今度は後ろに戦士を守っているためか避けることすらできないうた。

絶体絶命　まさにその言葉が相応しいだろう。

振り下ろされた大斧をハンマーの柄で受け止めようと悲壮な決意をした戦士が歯を食い縛って来る破壊に覚悟を決めていた。

だが、俺は間に合った。

「よお、お前ら大丈夫か？」

振り下ろされた大斧の刃は俺の振るう魔剣によって半ばから切り落とされて宙を舞う。

ンヴオオオオオオオオ？！

と雄たけびをあげるミノタウロス。

刃を失った大斧を放り投げて俺に向かって拳を振るってくる。それを魔剣で吹き飛ばす。

振るわれた左腕はボトリと地面に落ち、あまりの激痛にミノタウロスは慟哭する。だけど、俺は容赦する気なんかない。このままトドメを刺してやろうと剣を腰溜めに構えるが、後ろの魔法使いに気づいてしまう。

このまま倒してしまつたらおそろく戦士と魔法使いのプライドがズタズタになってしまう。

『我に隷属せし風の精よ。我に従え。我に隷属せよ。そして我が敵を蹂躞せよ！』

詠唱が終わったのだろう。

「後は任せませ」

と呟いて俺は背に庇っていた戦士にバトンタッチをする。「すまない」と野太い声で返されて戦士は突貫していった。

「ハイゼルさん、敵の動きを封じてください！！」

魔法使いは叫ぶ。

詠唱が終わったときに生成される魔方陣を構築しながら必死に狙いを定めている。おそらく身の丈に合っていない魔法なのだろう。維持するのに必死で動いている対象には当てられないのだろう。まあ、確実に当てれるようにサポートするのが戦士の仕事なのだからそれは仕方ないことか。デルブライトはサポートなしでどんどん魔法を当ててしまうから時折忘れてしまいが、普通の魔法使いというのは不慣れなものなのだ。

魔法使いの声に「応ッッ！」とだけハイゼルと呼ばれた戦士は答えると痛みに悶えるミノタウロスの脚にハンマーを横から叩き付けた。その時に発生した音は実にひどいものだ。骨が折れる音などという生易しいものではない。砕け散る音だ。

その痛みに苦しみながらもミノタウロスの赤い瞳に激情が走る。要するに怒ったのだ。キレたと言ってもいい。

倒れこみながら覆いかぶさるように接近しているハイゼルに残った手を翳していく。その大きな手で掴まれたらいくら瀕死のミノタウロスといえどもハイゼルは握りつぶされるだろう。

しかしだ。その攻撃をハイゼルは冷静に見切り、一步引いて避けた。そして空振りとなった手は地面へ着く。

地面に着いた手の末路は実にひどいものだ。上から振り下ろされたハンマーの衝撃を諸に受け、粉碎される。

ミノタウロスは膝をつき、懇願してくるかのような情けない表情

を浮かべる。死の恐怖というものを味わっているのだろう。  
ただだよ、あんたはこいつらを殺そうとしたんだ。だからさ。

「死ね

牛野郎！

【エカプレッシャー圧死】」

空から落ちてくる風の塊にミノタウロスは襲われる。

デルブライトとの戦いで使われた風の上級魔法。効果は上から降り注ぐ風の塊。魔力が上がれば上がるほど塊の数が増える。見る限り一個だろう。だって、ミノタウロスの身体に空いた穴は一つだけなのだから。

ブモオオオオオ……

という断末魔とともに息絶える魔獣。

ああ、そんな悲しそうな眼で死んでいくなよ。

殺そうとしたら殺される。当たり前だろ？

死んでいくミノタウロスを見て思ったことはそれだけだった。身勝手な思いなのかもしれないけど、本当にそれだけだった。

## 2 - 2 変な親子

魔剣を肩に提げてじつと二人を観察してみた。

おそらく壮年だろう全身鎧の戦士は疲労困憊。その手に持つ大きな戦槌を重そうに地面に突き立てて息を乱している。その後ろにいる群青のローブの青年も疲れ切っているのか立っているのも辛そうだ。普通の魔法使ってこんなもんだよな、と思う。魔法は強大な故に体力の消耗が激しいのだ。

そのまま数分過ぎ、沈黙が場を支配していたのだが、ハイゼルといったか。壮年の戦士はグツと背筋を伸ばして俺を見た。背高いな。俺もだいたい平均より高いが、その俺を遙かに上回る。俺を見た、というより見下ろしている感じた。

ゴホン、と咳払いをしつつハイゼルは口を開く。

「すまない。先ほどは助かった。我輩の名はハイゼルⅡフォンⅡブツシュファイア。しがない冒険者をしている。貴殿は名のある戦士とお見受けするが？」

堅苦しい言葉だ。型に嵌った名前だ。おそらく元騎士か？それとも騎士の真似事をするならず者か？どちらかはわからないし、冒険者同士経歴を聞くのはタブーとされているので聞くことはできない。それに野郎の過去など興味はない。

かといって相手が自己紹介をしているのだ。無視するわけにもいくまい。

「俺の名前はカシム。ただのカシムだ」

「おお、カシム殿か。もしか「カシム？！あの【魔王殺し】【魔獣装兵】【性騎士】【変態導師】と二つ名に困らないあのカシムさん

ですか?!」 黙れ、クライツ」

カシムの台詞に被せるように後ろで疲れ切っていて元気がなかったはずの魔法使いが急に息を吹き返した。 って、なんでそんなに俺に詳しいんだ?

「クライツっていつのか。えらく古い二つ名を知ってるな 【性騎士】は懐かしい。あれはそう、可愛い女騎士に決闘で勝てば好きなことをしてもいいと言われて本気で叩きのめしたときだ。裸になれと言った瞬間懸賞金をかけられてなあ。大変だったぜ。まさか王女だったとは思わなかった。王女が騎士なんて実在するんだなあ」

「憧れです!意識せず知らない間にそこまでのことを簡単にやってのけるカシムさんは僕たち美女ハンターの憧れです!極みです!象徴です!まさに英雄とはカシムさんの御身を表現するためだけに作られたのだと確信すら覚えてしまいます!」

「おいそんなに褒めるなよ。事実だとしても照れるだろ?」

「思うにそれは褒め言葉なのだろうか?」

褒め言葉かどうかは知らないが、足りない語彙で必死に褒めようとしてくれているのはわかる。それを俺は素直に受け取ってやりたいたいと思う。

「ところでハイゼルと クライツでいいのか?」

「はい!クライツ=フォン=ブツシュファイアです!」

「兄弟で冒険者なんて珍しいな」

「我輩とクライツは親子だ」

「親子で冒険者やってるのは初めて見たぞ。親子で風呂覗きか」

「いや、風呂覗きは自主的にってわけじゃないんですけどね。一応依頼です。これ知ってます？」

クライツは胸元から何かを取り出してくる。一つ目玉に翼が生えただけのわりとポピュラーな魔獣だ。よく使い魔にされているイビルアイという魔獣。番で使役すると夫が見ている映像を妻が映し出すという遠距離でも視界を共有できるという便利な能力を持っている。通常は使い魔は一体しか使役できないものなのだが、イビルアイは異例だ。デルブライトの言葉を借りるなら「二人で一人つてことなんじゃないかな」ということらしい。難しいことは俺にはよくわからん。

「で、それがどうしたって言うんだ？」

「依頼主が安全に覗きたいから、ということらしいですよ。他の美女ハンターたちや関係のない高ランク冒険者たちがこぞって参加しているのもそれが原因だと思います。成功報酬なので成功しないとお金が入りませんが、成功すれば莫大な富が入ります。その欲に僕たちは勝てなかったんですよ」

「クライツ、我輩は金に眼が眩んだわけではないぞ。こんな依頼がなくとも女の裸を見るためにこの場に赴いていた！」

「性に眼が眩んだって言いたいわけ？だから母さんにフラれるんだよ」

なるほど、そういう手もあるわけか。「マリー！我輩が愛しているのはお前だけだ！」とか叫んでいるハイゼルがいるが、何かトラウマでもあるのだろうか。泣いている。

それは置いておいて確かにそっちのほうが合理的なのかもしれない。だけどよ　肉眼で見ると何かを介して見るのとは全然違うぜ？やはり生がいい。生が一番だ。見るなら己の力で全てを切り開いたほうがいい。何故ならそっちのほうが充実感があるからだ。

「莫大な富ってことはもしかして王族とかか？」

「まあ依頼主からの直接の依頼じゃないですからわかりませんけどね。子飼いの魔法使いあたりじゃないですか？」

そりやそうだろうよ。女風呂を覗きたがる王族なんて沽券に関わるからな。必死に隠匿してるはずだ。仲介役の奴は苦労してるんだろうな。笑うのを堪えるために。

いや、女風呂を覗くのは男の浪漫だ。笑っていいことじゃないのかもしれん。命を懸けても問題ないほどだ。しかもそこにはあらゆる種族の美女たちが勢ぞろいしているのだ。なるほど、王族が見たがるのも無理はない。いや、待てよ。王族はモテるぞ。ただそれだけでモテるぞ。女の子にモテた上に女風呂を覗く？なんという罪深い奴らだ。まあ王族だという確証もないけどな。

「ところでお前らはなんでミノタウロスと戦ってたんだ？逃げたらいいだろ。あいつら足遅いしさ。戦うなんて体力と時間の浪費だぜ？」

「僕は逃げたほうがいいって言ったんですけどね……」

「逃げるなど騎士のすべきことではないっ！」

と息せき切って叫ぶハイゼル。叫ぶのはいいが、声に反応して寄って来る魔獣だっていることを知らないのか？それと「マリー、違うんだ、マリー」などと先ほどまで虚ろな眼をしてぼやいていたからどんな格好良い台詞を言ったとしても無駄だと思っぞ。

「いや、僕たちはもう騎士じゃないんだよ？過去にしがみつくのはやめようよ、父さん」

というか元騎士だったのね。たまにいるんだ、こういう奴らが。夢をもって騎士になったはずなのに何故か冒険者に戻ってきたり、冒険者になったりする奴らが。

「騎士とは職業のことではない。心構えのことである！」

「勝手にしてよ。けど、僕を巻き込まないでよ」

「お前も苦労してるんだな」

「わかってくれます……？」

と、会話はここで終了だろう。

背後からとつもない質量の持った地響きが迫ってくる。ミノタウロスは単体でも強いが、さらに厄介な性質を持っている。仲間を殺されたら凄く速度で追いかけてくるのだ。怒りに眼を真っ赤にして必死に追ってくるのだ。そう、背後から迫り来るミノタウロスのつてオーガもいる！オーガというのはミノタウロスよりも更に大きい巨人だ。その手に持つ戦槌はハイゼルの持つ者とは比較にならない。大樹のようなその腕から繰り出される破壊はまさに必殺。断末魔をあげる余裕すらなく死に至る。

立ち向かおうとするハイゼル。必死に罵声を浴びせて逃げることを促すクライツ。

どう考えてもこの二人ではあの大群相手では死んでしまう。少なくとも見積もっても十匹はいる。俺が加勢すれば問題なく倒せるが、そんなことに使う無駄な体力は持ち合わせていない。ならばどうする？簡単だ。

「あばよ」

言うなり俺は駆け出した。

てつきり加勢してくれると思っていたのだろうハイゼルは眼を見開いている。逡巡し、ハイゼルは答えを出したようだ。

「逃げるわけではない　これは戦略的撤退だッ！」

ブルツシュハイムの秘湯はまだまだ遠い。

朝日はまだ昇ったばかりだ。

2・2 変な親子（後書き）

まさにな道

## 2 - 3 ウイツチイ

まるで地震が発生したときのように大地は揺れている。その振動の原因は後ろを全力疾走するミノタウロスの群れのせいだろう。ミノタウロスより更に大きいオーガも追いかけてきているのだから地面が揺れたっておかしくない。

手に大きな斧を持つ牛男と身の丈を更に超える巨大な戦槌を担いでいるオーガに追われるというのはなかなか経験できることではない。この状況を俺は純粹に楽しんでいた。

「ハハツ、追ってくるぞ！急げ、急げ！」

俺の後ろで後れて追隨してくる二人に向けて言い放つ。

全身鎧を着込んでいるのに結構な速さで走るハイゼルとローブなのにひいひいと息を漏らしながら走るクライツ。しかし、俺の走りについてきているだけ魔法使いではマシなのかもしれない。かなり手を抜いているのも事実だが、運動能力の低い後衛職ではついてこれない者も多いのだ。やはりブルツシユリウムに挑んでくるだけの實力はあるということか。

「カシム殿！」

野太い声で呼ばれる。ハイゼルだ。

「このまま逃げてどうするのだろうか！」

「逃げ切れるまで走り続ければいい」

「逃げ切れなかったら?!」

「男らしく戦えばいいだろ」

「なるほど、騎士らしく華々しく散るのですな！」

「散ったらダメだろ?!」

散るの前提で戦うなんて冒険者ではありえない思考だ。結局は金を儲けるために仕事をするわけだ。騎士は誇りのためや主君のために戦うらしい。俺には理解できないが、そういう人間もいるのだらう。

後ろを振り返ってみるとミノタウロスの群れの中でも特に足の速い奴がいて、だんだんと追いついてきているのが見える。少しすればクライツに追いついてしまいそうだ。

助ける義理もないが、助けてやれるのなら助けてやるのが俺の信条だ。

疾走から急停止してその反動で背中に担いでいた【魔剣カイゼル・フォルヴァー】を解き放つ。

「クライツ、少し屈め」

その言葉に反応してクライツは瞬時に伏せてくれた。なかなかの反応だと思っ。

確認した後に一閃する。ミノタウロスは反応して斧の柄で防御したが、それにわざと弾かれるように魔剣をぶち当てて、その反動で更に軌道を変える。臂力で無理やり変えたこともあるせいか、腕になり無理をさせてしまったが功を奏したようだ。俺の放った撫で斬りはミノタウロスの胸は輪切りにした。飛び散る鮮血は濃厚な死の匂いを撒き散らす。ミノタウロスは呆気なく死に果てた。本来なら強者のはずのミノタウロスであるが、正直これくらいの相手なら

れている。数が多いから面倒くさい。ただそれだけの理由で逃げている。あまり格好よくはないが、やはり体力の無駄遣いはよろしくない。

伏せているクライツを無理やり立たせる。

「立て。行くぞ」

その間にもまた追いついてきた奴らを応対しなければならなかった。

前に出てクライツを庇うように立ち塞がる。なんで俺がこんなことをしているんだろう、と疑問に思うが何となくだ。

今回の相手はミノタウロスとオーガだ。ミノタウロスが真横からその大きな斧を振るってくる。受け止めたら今戦槌を振り上げているオーガに殺されてしまうだろう。受け止めるのは却下だ。

では、いなすか？これもノーだ。結局は戦槌でやられる。

では避ける？これもダメだ。後ろにいるクライツが殺される。じゃあ、どうすればいいかという割と簡単な答えが出る。

殺られる前に殺ればいい。

戦槌を魔剣で受け止めると同時に振り下ろされる戦槌に全身全霊の蹴りをお見舞いする。魔獣の毛皮の靴なのでそれなりの装甲はあるが、所詮は毛皮。やはり鉄には勝てない。しかし。

「う　　おおおおおおお！」

そこは根性と筋力で押し返す！

左から来た斧の衝撃を受け止めながら更に真上からの戦槌を蹴り飛ばす。とてつもなく身体が軋む行為だが、なんとか耐え切った。

「痛えじゃねえか！」

そのまま両者を弾き飛ばして体勢が崩れたところに俺の一撃をお見舞いする。

防御をする暇さえなく敵は死に果てた。

クライツは俺の雄姿を見て「すごい……」と呟いている。そんな当たり前のことを言われても困る。

「さっさと行け」

「あ、はい。ありがとうございます！」

言うなりクライツは全力疾走で駆けていった。息を切らしているわけには結構な速さでだ。まだ体力が残っているらしい。良いことだ。ハイゼルははとうに走り去っている。あいつ実は臆病者じゃないのか？普通はクライツのこと守ってやるだろう。まあ自分じゃ勝てない敵を相手にする意味もないか　って、うん？

何かが変だ、とこの時に思った。

だってそうだろ？魔獣は基本的に馬鹿じゃない。自分より強い奴を決して狙ったりはしない。好き好んで自分が死ぬような敵を相手にしない。弱肉強食の世界なのだから当然のことだ。強い奴には媚びる。これが魔獣の鉄則だ。

それなのに圧倒的に強者の俺を追いかける。仲間を殺されただけで。それはおかしい。何故追ってきているんだ？

よくよく見るとミノタウロスやオーガの眼がおかしい気がする。まるで何かに操られているような……。

「そんなわけないか。魔王がいるわけでもなし」

他の美人ハンターも来ているはずなのに俺のところにごここまで敵が来ていることは謎だが、運が悪かったのかもしれないな。つまり知らないことを考える暇はない。

俺もさっさと行こうと思いついて追いかけることにした。

おかしい、と思い始めたのは先ほどのことだが、今は確信に近くなりつつある。

結局のところ俺は魔獣の群れの半分ほどを殲滅してしまったが、魔獣は一向に引く気配がない。魔王のときも魔獣の相手をいくらかしたことがあるが、あのときは瞳の中に恐怖がありながら挑んできた。

俺を殺さなければ魔王に殺される、という恐怖。つまりは魔王が怖いから従っていたわけだ。そんな哀れな魔獣を俺はあっさりと殲滅したが、罪悪感是不思議とない。

さて、今も魔獣の相手をしているわけだが、瞳の中に浮かぶ感情はなんとなくわかってきた。

それは陶酔だ。王国の騎士たちの中でも更に忠誠が篤いと言われている聖騎士　騎士の中でも更に上位の者たちのような瞳をしている。主君の命令を喜んで行うという狂信者の目。どういうことだ。こいつらは魔獣のはずだぞ。

クライツやハイゼルを逃がすために何度か応戦しているうちに気づいたのはそれだった。・

今は随分と先に走り去ったのを確認したので俺も追いつくために全力疾走をしている。俺のほうがり速いようで魔獣に追いつかれる心配もない。

それにしても　ふむ。

デルがいればこういうことをきっちり推察してくれるのだが、生憎俺はこういう思考は得意ではない。基本的に真っ直ぐ進んで叩き潰して前へ進んできたからだ。こういう絡め手のようなものは苦手だ。

だってそうだろ。明らかにこの魔獣たちは俺を　俺たちをどこかへ誘導するように追いかけている。わかっていてそれに従っているのもおかしいが、こういう場合はだいたい親玉が待ち伏せている

ものなのだ。そいつを倒せば終わる。一番早い。

「にしても走りっぱなしだな」

別に走るくらいで疲れるほど柔な鍛え方をしていないので大丈夫だが、心配なのはクライツとハイゼルだ。クライツは魔法使いだし、ハイゼルはあの全身鎧だ。いい加減疲れきっているはずだろう。

それなのに追いつけない。ハイゼルの足跡はくつきりと地面に刻まれているので絶対先にいるという確信はあるのだが、さすがにオカシイ。それほどまでに体力がある奴ならもうちよつと強い。少なくともミノタウロスくらいは自力で倒せるはずだ。

それなのに　　どういうことだ？

「まさか　なあ」

嫌な考えが脳裏に過ぎる。

そういえば聞いたことがあるんだよな。森の中にいる魔女の話。メフィズスウィッチイという元々は人間なのに魔族と契約して魔女になってしまった女の話。とてつもない美女だったらしく、あらゆる男から求婚されたいらしいが、結局それら全てを放棄して森に逃げたっていう。

まあ実際のところ興味があつて調べたことはある。結局は他の女の嫉妬で色々嫌がらせをされて命を絶つたためにここへ来たんだろう。そのときに秘湯に行こうとしていた魔族と仲良くなったんだろう。魔族は弱っている人の心に入り込むのが上手いから。

いやでも、ここ数年は魔女は発見されてないと聞くと、魔女は既に死んでいるじゃないか、とすら言われている。そんなに美人なら会ってみたいと思つてブルツシュリウムの魔獣を討伐中に何度も探したが結局は見つからなかったし。

もはや伝説の中での話だ。

ちなみにその魔女の得意分野は幻覚だと言う。

要するにありえないことを見せ付ける能力だ。人では決して持ち得ない特殊な力。もし持っている人がいたとしたら王国の召抱えになれるだろう。いろいろな妄想がある意味現実として享受できるのだ。不埒な男女が欲しがらないわけがない。権力があれば尚更だ。しがらみがあるのなら更に欲しいだろう。見たい夢を見れるわけなのだから。

しかし、魔女の話を設定して考えると現状は辻褄があう。

もしかしたら魔獣たちは魔女に操られているのだろう。

そして もう 、と結末を設定してしまった。確定事項のように考えてしまった。自分の推察が合っているかのように思ってしまった。それは間違いないという確信がある。

ブルツシユリウムの魔獣はだいたい調べつくしている。その情報を統一して考えるとこれ以外考えられないのだ。

と、急に足跡が途切れた。

途切れた先を見て俺の足も止まってしまふ。

俺の視界に飛び込んできたのは開けた場所だった。

森の中だというのにそこには木々はなく、綺麗な湖があった。

その中心に陸があり、そこにはとてつもなく整った顔立ちと理想的なスタイルをしたお姉さまがいた。まあ下品な言い方をするとつともなく色っぽい表情を浮かべたボンキュッポンの姉ちゃんが薄手のローブ といっても太腿は見えるかなり大胆な格好のものが、湖の前で立ち尽くしているクライツとハイゼルへにつこりと笑んでいた。

「め、女神様だ」

とハイゼルは言っているし、クライツにいたっては言葉すら出ていない。

あれは魔女だなあ、と確信するには十分だ。人ではありえない美

しさがある。きっとそれはあの禍々しい魔力だろう。デルほどではないが、かなり濃厚な魔力を秘めているようだ。

しかし、まあなんとも

「美人だなあ」

正直なところこの時点で俺の敗北は決まっていた。女を斬れるわけがない。たとえそれが異種族であろうともだ。魔獣の性別は見た目でわからないからいいが、魔女は元々人間だけあつてすぐにわかる。どうするか。

まあとりあえずは後ろから迫り来る魔獣をどうにかせねばなるまい。

振り向いて相手にしようとしたところ、魔獣たちは追ってはきていない。どういうことだ？

「アナタがカシムさんですね？」

そんなとき聞き覚えのない凜とした声で呼ばれた。とても透き通った声。静謐な感触。聞いているだけで心地が良くなるようなそんな声。これはとても危険なものだ。

「ああ、そうだが」

答えるときも腹に力を込めてそう言った。気を抜いたら。女性経験の皆無な俺にとってはあまりに魅力的過ぎる。全てを委ねてもいいのではないかと思ってしまう。

「そんなに警戒しないでください。そちらの御一方に聞いただけです」

「魔女相手に警戒するな、と?」

「ええ、魔女相手にでもです」

にっこりと微笑まれる。とてつもない色香を放つ笑顔は俺の精神力を刻み、奪い取っていく。負けそうだ 目の前で既に屈しているハイゼルやクライツのように負けてしまいそうだ!

ぐらつく足元をしっかりと抑えて俺は魔女を睨みつける。

「そんなに睨まないでください。怖いです」

「そんな眼で俺を見るな。惚れてしまっただろ!」

正直半分は惚れていそうだ。

とてつもなく魅力的な瞳をしている。黒い瞳に見えるが、少しばかりブラウンの混じった特殊な色合い。ここらでは見ることにない、宝石のような美しさを秘めている。吸い込まれてしまいそうだ。

「あら、嬉しい。私の可愛いミノタウロスやオーガを惨殺した人とはとても思えません。何度私の魔獣を倒せば気がすむのですか?」

「好き好んでやってるわけじゃない」

「好き好んでやってなければよろしいと?」

「さてな。俺は気に病むことはないから興味もない」

「そうですか。まあこのような無粋な話題は必要ないですね」

確かにそうだ。無粋にもほどがある。俺とコイツは敵なのだから、

会話すら不要なはずだ。しかし、ああなんでだろう。少しだけ話して欲しいと思わせられる。

「ああ、じゃあどういふ話題をお好みで？俺は秘湯まで進みたいだけなんだが」

「それは困ります。あそこの防衛を私はとある人から依頼されていますので」

通りで討伐中に見えなかったわけだ。そういう情報はどこかから流れていてその間は身を隠しているわけだな。つまりはどこかの誰かと繋がっているということ。

だが、そんなことは関係ない。俺は決めたんだ。覗くと。あらゆる美女がいるという秘湯へ俺は進むと決意しているんだ。退くことはできない。諦めるなんて論外だ。倒れるなら前のめりに倒れる。そしてあわよくばその瞬間で良いから俺は夢を見るんだ。

「それは困る。俺は何としても覗かなければならないんだ」

「あなたが困っても私は何も困りません」

「ああ、俺もお前が困っても何も困らない」

つまりはそういうことだ。お前の事情なんか知ったことか。いくら綺麗な姉ちゃんでもコイツは敵だ。敵のはずなんだ！

「心は痛まないのですか？女性を困らせるなんて最低です」

「痛まないな」

嘘だな。少しは痛む。

「だからモテないんですよ」

「何故それを?!」

かなり痛んだ!俺の心が悲鳴を上げた!

言葉という刃は時に人の心を切り刻む。あまり俺のトラウマをいじらないほうがいい。男つてのは身体は頑丈だが心は弱いものなんだぜ?乙女のように扱えこの野郎!

「私が何と呼ばれているかご存知ではなかったのですか?知っているような口ぶりでしたけど」

「ああ、知ってるよ。幻覚を見せる魔女だろう?」

「ええ、そのような魔女と眼を合わせて会話するなんて無用心だと思いませんか?警戒しないように言ったのは私ですけど、それはあまりに無防備だとは思いませんか?」

「アッ!」

ああ、馬鹿なのは俺だった。

魔女と対峙した場合の対処法は簡単だ。今まで婆さんみたいな魔女を相手にしたときはいつもそうやっていた。

会話をせず眼を合わせず一気に攻撃を畳み掛けて意識を奪う。

ああ、でも相手が美人だったから、縁がまざらないと言えるほどの造形の女性だったから話してしまった。声が綺麗だったというのもある。もう少し聞いていたいと思わせる声音だったせいもある。

けど結局は俺の男心のせいなんだろう。やはり女性と話す心が

躍る。

俺はあまりにも馬鹿だった。男はみんな馬鹿なものなんだろうが。

「しばし悪夢を堪能ください。その間にあなたは魔獣に食されていることですよ」

目の前でぐらついていく。おそらく昏睡状態にされて夢を見るんだろう。

「同胞を殺した恨み　など無粋なことを言つつもりはありません。だから、私はアナタに言えることは一つです。さっさと死ね、人間」

そんなことを言われながら見せられる夢なのだ。あまり良いものとは思えない。

こんな呆気ない最後は嫌だなあ、と思いながら俺は意識を手放した。

2・3 ウイッチィイ(後書き)

あはるん

## 2 - 4 変態（前書き）

この物語は英雄である主人公が悪役をばったばったとなぎ倒すストーリーです。

決してカオスな展開にはなりません。

ましてや主人公が変態なんてことはありません。

悪いのは全部世界のほうだ！

覗きが犯罪だってだれが決めた！

覗きはまさに え？110したって？

ちよ、ちよ、待ってよ。別に俺は覗きを勧めてるわけじゃ

アッー！

## 2 - 4 変態

幻術というものは極めたら最も恐ろしいものだと言われている。何せ相手の視覚を完全に奪えるのだから。

常に現実とは違った映像を見せられれば為す術などあるはずもない。

幻術に長けたものは視覚だけではなく、嗅覚や聴覚、味覚や触覚など五感全てを操るといふ。

しかし、これは予想外に過ぎた。

「ふざけやがって　！」

俺の股間にぶらさがっているはずの大事なものが消去されている。それだけではなく、視界が低くなっていることから身長が低くなっていることもわかるし、身体が華奢になったのか、鎧が重いし、ブカブカだ。

「私は幻想を操る魔女。私が願うだけでそれは現実となる。どうですか？女の子になった感想は？」

最低で最悪だよ！

なんだこれ。股間がさびしいぞ。あるべきものがないだけで全てのバランス感覚がおかしくなっているみたいだ。

溢れるばかりの力の脈動を感じていた俺の肉体は今となっては弱い力しか出せない。武器を軽々と扱えたはずの腕力は衰えきったのか、超大な魔剣を持ち上げるにはあまりに力が足りなさすぎる。持ち上げようとしても情けなくプルプルと震えるだけだ。非力なのはこんなにも不便なものなのか。

ならば、と一足飛びで魔女のところへ突進しようとしたが、鎧の

重みに負けてしまい、俺は前のめりに豪快に飛び込んだ。 転倒した。

「アイタタタッ！」

ズザザザァー、と土の上を見事に滑る。傍から見れば俺は阿呆にしか映らないだろう。

ググツ、と腕に思いっきり力を込めて立ちあがろうとするが、力が足りない。

俺は立つことすらできない、生まれたての馬ほどの存在に成り下がってしまった。

悔しくて涙が出る。

俺は 俺は ツ！

「立つことができないようじゃ 自分の裸すら満足に見れねえっ！目の前に湖面があるというのに、それなのに俺は自分の肢体を見ることがすらできねえっ！感触的にはどうだ。これはどうだ。なかなかのおっぱいじゃねえか！身長だって低くなってるぞ。かなり可愛いんじゃないのか？！問題は顔立ちだが、柔らかな感じになってるか？！釣り眼のままなのか？それはそれでいいかもしれない！最高だ！早く、早く、俺に自分の裸を見させてくれ！」

それまで余裕の表情をしていた魔女の顔が一気に歪んだ。

まるで俺の言っていることが理解できていないというようなそんな雰囲気醸し出している。

まあ理解できることではないのかもしれない。

俺の気持ちは恵まれないモテない男たちにしか理解できないことなのかもしれない。

というより、理解されたくない。

もし、今誰かが「お前の気持ちはよくわかるよ」などと言いやが

「だったら「勝手にわかったようなフリをしているんじゃないか」と激怒してしまうかもしれない。

本当にわかってくれる奴ならば、俺はきっとそいつと親友になれるかもしれない。

だが、わかったフリをするやつもわかってくれるヤツも今周囲にはおらず、ただただ俺の叫びがブルツシウムの中の森の中を木霊するだけだ。

「俺は裸が見たいんだ！女の裸が見たいだけなんだ！俺は自分で言うのもあれだが、なかなか綺麗な身体をしているぞ。鍛えぬいたから、なかなか見目麗しい肢体をしているぞ！それが女になったんだろう？感触的にはおっぱいだって大きいぞ。これはかなりのものじゃないのか?!」

「予想外ですっ！この男、全くダメージを受けていないっ?!」

良いこと考えた！

見れないのはわかった。

だが、手は動く。動かせる。

ならば　ならば！

「せめて、揉む。俺は揉むぞおおお！」

言うなり俺は身体のパネをあますことなく利用して仰向けになった。

そして、皮の胸当ての隙間から手を入れて自分の胸をまさぐった！  
柔らかく、包み込むような温かいものがあつた　　が、

「別に気持ちよくなーな。自分のものじゃ興奮もしねえ」

結論が出た。

他人のものだから興奮するのであって、自分のものだと意味がないということを知ってしまった。

世界の真理を掴んでしまったが、この真理を語るべき相手はいない。このことは俺の胸の中にだけ留めておこう、と固く決意する。

「自分の裸は見たいけれど、自分の裸じゃおそらく気持ち悪いだけだ。男の身体に戻してもらおうか」

「仰向けのまま何を偉そうに言っているのですか？あなたは自分の状況を理解していないのですか？」

もちろん理解している。

今の状況としては俺と魔女が対面しており、魔女の横には先程俺が助けた冒険者が二人いる。ハイゼルとクライツだ。

何故か魔女に平伏してはいるが、きつと俺のことを助けてくれるに違いない。何せ助けたのだ。恩に報いるのは当然のことのはず。

しかも、ハイゼルは騎士道がどうか言っていた。

俺は知っているぞ。『騎士道大原則の一つ。命の恩は命を持って返さなければならぬ』ということだ。

だから

「ハイゼル！俺を助ける！」

他力本願極まりないが、俺は立てない。立てるほどの筋力がない。甚だ不本意ではあるが、人の助けがないと起き上がることもすままならないのだ。だから、恥も外聞も何もない！助けて下さい。お願いします！

その祈りは通じたのか。平伏していたハイゼルはのろのろと起き上がり、俺の方を見た。

先程までキラキラと輝いていた瞳は濁っていて、全く意志を感じない。欠片も知性を感じない。

「どうということだ……？」

戸惑っている、くすくす、と嘲笑うかのような魔女が俺を見下している。

「まだ気づいていないの？とその笑顔が悠然と物語っている。

まさか……？！

「洗脳か……」

「人聞きが悪いですね。私は洗脳の素養を持っていません。これは私の美しさの結果です。それと、単純極まりない魔法を併用していただきますよ。【魅了】<sup>チャーム</sup>、よく聞く魔法でしょう？」

【魅了】<sup>チャーム</sup> 確かによく聞く魔法だ。簡単な術式で発動できるノリスクの魔法。効果は自分の魅力を最大限に引き出すことができるということ。そして、無差別的に魅力をばらまいて術者に惚れさせるという驚異の魔法。

あまりに恐ろしいので禁術指定されていたりする。上手く使いこなせばこれだけで一国の主になることすら容易だからだ。

なればこそ、この魔法に対する防御訓練などはある一定の階級を超えたあたりから義務となる。

男に溺れたり、女に溺れたりして退廃せぬように、との処置だ。

実際、【魅了】<sup>チャーム</sup>を使って一大ハールムを作った奴を俺は知っているが、バレて国外逃亡の身になっていることも知っている。

口癖は「なあカシム。良い女見つけたんだ。紹介するぜ？金貨一枚で」だった。

魔術師だったわけではなく、たまたま術式を教えてもらっただけという幸運な男だ。

たまたまというよりもあれは一種の悪意すらあったように思える

が。

方法は聞かなかったが、いわゆる恐喝の部類に入るのではないだろうか。詳しくは知らないので推測で物事を語る気はないが。

「誰かの依頼でここを守ってるんだろ？それなのに禁術指定のものを使うなんて大胆なやつだな」

「ふふ、ここは治外法権のようなものですよ？裁く者などいるはずがないではありませんか。それに　これは万国共通の考えだと思います。要するに使っているということを隠し通せばいいのですよ。そうすれば誰にも気付かれることなく、穏便に過ごせます」

「そうかい。まあそりゃ良い考え方だな。俺の知り合いにもそういう考え方のやつはいっぱいたけどよ。だいたいは破滅したぜ？」

「私はなりませんよ。現に私は自由です。それに貴方は人のことを言えないでしょう？女風呂を覗くのは立派な犯罪ですよ？」

「俺は死ぬ覚悟すら決めてここまで来ている」

「その情熱を違う方向へ向けようとは思わないのですか？」

「俺はやりたいことをやる。今やりたいことは美女の身体をあますことなく視姦することだ。これは俺の正義であり、俺の存在意義であり、生き甲斐でもある」

「堂々とハレンチなことを仰いますね。死んだほうがよろしいのでは？差し出がましいようですが、お手伝いさせていただきますよ？」

「まだ見ぬ世界が俺を待っているというのなら、俺は死ぬわけには

「いかないな」

「そつだ。死ぬわけにはいかない。  
俺はまだ何も成し遂げていない。  
目標を達成できていない。」

最初は生活苦に追われて仕方なく冒険者になった。その次は生活レベルの向上のためにがむしゃらに魔獣を討伐した。いつの間にか強くなり、地位も名誉もそこそこにあつたが、彼女ができなかった。だから、俺は魔王を討伐した。

結局はモチなかつたわけだが。生まれてからずっと彼女ができたことなどあるはずもない。  
そして、今の俺がいる。

女風呂を覗くために命を懸ける馬鹿がここにいる！

俺は絶対止まらねえ　止まってたまるかよ！

どんな障害が立ち塞がるかと、俺は決して諦めねえ。  
女の身体になったからどうしたってんだ？立てないから何だ？諦める理由になりはしない。

そのように諦めない俺を見る魔女の眼は冷たかった。  
まるで虫を見るかのような、侮蔑の混じった恐ろしいまでに冷え切った視線。

俺　　軽蔑されてんのかな。

「そつですか。残念ですが、貴方には死んでもらおうと思います。  
主観も多分に入りますが、私は貴方のことが理解できそうにありません。異性の裸は魅力的ですか？ずいぶんと俗物的な考えです。そもそも理解したくもありません」

「俺は死なねーよ」

「私かなぜこのように長々と無駄話をしていたかわかりますか？」

「さてね」

「地響きが聞こえませんか？」

「ああ、聞こえるな。肌で感じるよ。大地が揺れているな」

実のところ先程から聞こえている。

身体全体で感じる地響きは間違いなく巨大な質量を持つ何かがちらに近づいていることを教えてくれる。

「貴方を追っていた魔獣は私に魅了されていたものたちです」

さつき俺がぶっ殺した奴らはこいつの仲間だ、ってそういえば言ってたな。

「そして、私は幻術を使うことができますが、戦闘能力はからっきしです。というよりも、女に戦闘能力などいらなというのが私の持論です」

色香で勝負つてわけか。

というよりも、あれだな。わざわざ戦う必要がないんだろうよ。何せ自分の手となり足となって動いてくれる従僕がいるんだから。ある意味それは特権だよなあ。

俺なんか、今は自分の身体すらままならない。

「私の下僕はいくらでもいますから。貴方にトドメを刺すのは私の下僕たちです」

「なるほど、わかりやすいな」

仰向けなので視界が広い。  
視界の端っこにミノタウロスやらオーガがたくさん見える。  
こりゃ絶望的だな。

ブモオオオオ！

なんて雄叫びあげてるし。

なんか眼が真っ赤になってるし。超怒ってる？何か俺悪いことした？ちよつと殺しただけじゃん。

殺される理由には十分すぎるな。

「つまり、貴方は私に触れることすらなく、惨めに死に果てるということです」

何ということだ。

俺はまだ死んでいないのに死ぬのが決定事項にされている。

にこりとも笑わずに冷たい視線で俺を見下しながら裁決を下してくれる。

バイゼルとクライツを侍らせながらそんなことを言ってくれる。

「最後に聞かせてください。雑魚のように死ぬというのはどんな気持ちですか？」

俺の頭上には数多の魔獣が君臨していた。

大斧や戦鎚を振り上げる魔獣がいた。

絶体絶命の大ピンチ 　　ってわけでもない。

実際のところさ。動けないっていつてもさ。何もしてなければ動けないだけだ。

俺には魔獣の胸当てがある。これを使えば身体能力を底上げでき

る。危険なまでに強化できる。

今使うのはたいへんよろしくないが、まあ死ぬよりマシだな。

「覚醒しろ」

その言葉をキーとして魔獣の胸当てが俺の身体を浸蝕する。

常日頃、俺にやり込められている鬱憤を晴らすかように、いつもよりも過激な激痛を俺にプレゼントしてくれる。

俺が弱っているから、今がチャンスだとばかりに攻め立ててくる。まあでも耐えられないほどじゃない。

ほんのちよつと腕がもがれそうになったり、腹が押し潰されそうになったり、足が引き千切れそうなくらいの痛みなだけだ。我慢できないほどじゃない。

脂汗をだらだらと流しながら、俺は永遠にも近い一瞬で心から死にたいと思えるほどの激痛を耐えて、ケルベロスの加護を一身に受けた。

ドガアアン！、と地面が破裂するかのような爆撃音が鳴り響く。何度も何度も鳴り響く。

食らえばきつと痛みすら感じるまでもなく死ねるだろう。

まあ、俺はあっさりと回避したわけだが。

即座に立ちあがり、横に飛び跳ねて、俺は逃げ延びた。

「痛え。超痛え。ちよつとは加減しろよ。鎧のくせに持ち主に攻撃を加えるとかどういうことだよ」

ゴキリ、と首を回して俺は言う。

身体全身の痛みは消えている。

万全というほど身体の調子は戻ってはいないが、男の身体よりも全然能力は劣ってしまいが、ミノタウロスやオーガ如きを相手にするには十分だ。

「おら、こいよ。テメエらに俺の怒りを刻んでやる。お前ら全員男だろ？俺と同じ苦しみを与えてやる」

言うなり俺は飛び込んだ。

視界に映る魔獣たちの数は10匹ほど。全く問題ない。

魔獣たちの隙間を掻い潜り、ど真ん中に立つ。

まさに四面楚歌という状況。自分からこのような危機に立つなど馬鹿でしかないかもしれないが、別に俺の場合は問題ない。

「大地粉碎剣」

地面に魔剣を突き刺す。

知覚できるものがいたら卒倒するかもしれないほどの【<sup>オーラ</sup>気】を切っ先に集めて爆発させる。

その爆発の余波で地面が吹き飛び、大地は敵に猛威を振るう。

防御する術などあるはずもなく、一撃必倒のために編み出した技は俺の敵を叩き伏せる。

たった一度の攻防で魔獣は既に息絶えた。

「さっき俺に聞いてきたな。雑魚のように死ぬというのはどんな気持ちですか？だっけか？」

突き刺していた魔剣を引き抜く。

至極格好よく見えるように、大仰に魔剣を肩に担ぎ、空いている左手で頭髪を梳いてみせる。

「存外に悪くない気分だぜ？逆転勝利なんてよ。まさにヒロイックサーガみたいじゃねえか」

ついでとばかりに親指を地面に向けてやる。

最上級の指での罵倒。

意味合いとしてはそう　　ざまあみろ、くそつたれ！だ。

「まあ、俺も弱いものイジメなんて趣味じゃねえ。さつさと俺を男に戻せば身体の安全も命の保証もしてやるよ。女を殴るなんてしたくねえしな」

だけど、その台詞は途中で途切れることになる。

予想外なのは予想外だったが、こんなえぐいこと普通するか？

へこたれているように俯いていた魔女は実のところ笑っていた。嗤っていたのだ。

くつくつ、と嗜虐性の強いまさにDSな高笑いを押し殺していたのだ。

「圧倒的勝者は私でしょう？」

言っなり見せてきたのは俺の　　俺のッ！

「それは　　ッ！」

「名前を言うのもおぞましい。この汚物」

ぐりぐりと圧力が加えられているのか。

メキィ！という出してはいけない擬音が耳へと届く。

なんかすげえ痛々しい音だぜ……。思わず今はない息子を求めて手が動いてしまった。

「ふふ、人質としては十分でしょう？それに、下僕はまだ二人ほどいます」

すつ、と魔女の前に出てきたのはハイゼルとクライツのブッシュ  
ファイア親子。

結局はこうなるのかよ。

「卑怯者っ！つて罵る権利を俺にくれ」

「どうぞ、存分に。私は虐めるのが好きです。子犬が泣きそうな顔  
をしながら抵抗してくる様を見るだけで絶頂すら迎えられます。貴  
方も 今の状況は子犬と変わらないでしょう？」

「クツ  
」

未だに圧力は加えられ続ける。

俺の痛みが止まらないっ！

脂汗が止まらない。冷や汗が止まらない。絶望が俺の真正面から  
向かってくる感じだ。

肉体的には痛くはないはずだが、何かがとても痛々しい！

「ハッ、その二人は既に意識ねーのかよ？」

「ええ、この二人は既に私の虜ですよ？」

「そうかい。じゃあ仕方ねえな」

ああ仕方ないな。

本当に仕方ない。

俺だつて好きでやるわけじゃねーよ？助けられる方法があればそ  
れを行使しようと思うよ？でもさ。仕方ないだろ？意識ないんなら  
仕方ねーよ。ほら、俺言っただしさ。デルブライトには言っただしさ。

格好良く言っちゃったしさ。俺の障害は全て踏みつぶすって言っちゃったしさ。だからさ。仕方ないよなあ？

「まあ、女に溺れて死んだ友人は数えられないほどいるしな。全員哀れな死にざまだった。けど、結構満足そうな往生した顔だったから、きつと本人は満足だったんだろうぜ」

肩に担いだ魔剣を両手で持って構えてみせる。

戦闘態勢は十分に整った。

目の前にいる敵になったハイゼルとクライツはペアでようやくミノタウロスに勝てるような程度の実力。

正直なところ、束で来られても負けることはない。

「え？え？」

俺の態度に魔女が困惑する。

俺が止まるとでも思ったか？

止まるわけねーだろ。止めたければよ。せめてドラゴンでも連れてこいやっ！

「まあ、これも何かの縁だったのかもしれない。せめて苦しめないように殺してやる」

「女風呂のために人間を殺すのですか？！」

今更そんなこと言われてもなあ。

ここに来るまでに親友すらぶった切ってるわけだしな。本当に今更だよな。

「ん？うん。そいつら今日会ったばかりだし。友情すら芽生えて

ないし。死んでも何も困らないしな。まあこんな森だ。多少行方不明者が出ててもバレはしねーよ」

「さ、最低ですね!」

「お前も言っただろ?」

ニンマリと笑ってやる。

「バレなきゃいいんだよ」

火蓋は切って落とされた。

## 2 - 5 ・魂の叫び

人を殺すということに抵抗を感じなくなったのは何時の頃からだろうか。

最初殺したときの敵ははっきりと思い出せるのに、慣れてしまつてからの敵の顔は思い出せない。

最初は怖かった。あっさりと零れ落ちていく命の雫を見ることに恐怖した。生命を摘み取るということに対し、俺ははっきりと罪悪を感じていたんだ。

何度も吐いた。何度も泣いた。何度も悔やみ、何度も許しを乞うた。

誰に対してのものだったのか　今はわからない。

ただ、でも、今だからこそわかることがある。

「生きるってのはよ。誰かの命を摘み取るという代償を払わないとできないものなんだよ。そして、何か強い目的がないととてつもなく無為なものなんだよ」

ギチリ、と身体が軋みをあげる。

鎧によって限界まで強化されている俺の身体は悲鳴をあげている。あまりに脆い己の身体に絶望しかけるが、今ある武器は己の身体だ。この身体を上手く使つて戦うしかないのだから、ないものねだりをして意味がない。

「たとえばそれは金だったりするだろうよ。名誉だったりするだろうよ。恋人のためかもしんねえし、子供や親のためかもしんねえな。つまりはよ。何かしらのことを求めて生きるんだよ。ただ生きてるだけってのはな。死体と何も変わらねえ」

ハイゼルがかかげた戦槌を透かす。

続いてクライツの魔法が束になって押し寄せる。

もともと魔法を反射する俺の鎧に効果などなく、完全に無視して俺は構える。

戦槌を振り下ろした反動で硬直しているハイゼルの横っ腹はがらあきだ。フルプレートフルプレートの鎧をつけているが、俺からすれば意味などなく

ギチギチギチギチ 収束していく力の塊を解放し、魔剣の腹で思いつきドリツキ飛ばした。

ガフツ、と喀血しながら吹き飛び、湖面へと投げ落とされた。壮大な水しぶきの音が轟きわたり、数瞬、水柱が天へと登る。

「悲しいことにそんな死体ばっかが跋扈してるってのも事実なんだよ。だからよ 俺はあいつらとは違う。違ってみせるって心に決めて、己を奮い立たせて、両足ともに踏ん張って生きてんだ」

水柱を見てもクライツは一切の動揺なく、俺に対して激烈な魔法を打ち放つ。

バーストフロア【脈動する水流】シャイニングレイ【大地の亀裂】アースアンガー【狡猾な影刃】シャドウバインド 高等魔法の連続行使は俺に対して遠慮なく為されるが、すべて反射されてあらぬ方向へと霧散する。

魔法というものは連続で使うことに適していない。連続で使う毎に倍倍で消費する魔力が増えていき、魔力だけではなく生命力すら殺ぎ落とされるようになっていく。

頬はこけ、穴という穴から血が流れ出るようになっても、クライツは詠唱を止めない。

朗々と、まるで歌を詠うかのように、痛みなど感じていないかのように紡いでいく。

チャーム【魅了】のせいですべてを魔女のために捧げることを硬く決めて  
いるんだろつ。

命の危険を顧みず、無茶をするやつは嫌いじゃねえ。嫌いじゃねえけどよ。

別に好きでもなんでもねえ。

ただ、近づいていき、ただ、殴る。

強化された俺の左腕から繰り出される拳はクライツを湖まで運んでいった。

「こういうのを覚悟って言うんだよ。覚えておけ」

魔女に向かって言い放つ。

本当にやるとは思っていなかったのか、さすがの魔女も顔色が悪い。

やや青ざめた美貌を見るのはあまり心地よくないし、女をいじめするのも趣味じゃないけれど、俺にだって生きる目的がある。そのためなら何だってやってやる。

鬼だと言われても、悪魔だと言われても、馬鹿だと言われても、俺は決して妥協しない

「本当に　微塵の躊躇もなく葬りましたね。さすがです。最低です。まさか本当に実行するほどのクソ野郎だとは思っていませんでした」

はしたない言葉を使っちゃいました、てへ、などとはにかむような笑みを浮かべる魔女は、しかし、実際のところかなり怖気づいているように見える。

冷や汗をかいているのか、額にはうっすらと流れる雫が見えるし、口が渴いているのか、声が霞んでいる。見るからに緊張状態だ。

「褒めるなよ。それに死んではいないだろ　たぶん」

「全身金属鎧をつけたまま湖に落ちて助かりますか？脆弱な肉体し

か持たない魔法使いを思いっきり殴り飛ばしておいて、生きてるとお思いですか？」

「さあな。至極どうでもいいことだ。俺には関係ねえ」

別に死んでもかまわないという思いで攻撃したしな。

その後どうなるうが知ったこっちゃねえよ。

殺すつもりで攻撃したけれど、確殺するつもりはない。ただそれだけの違いだったわけだしな。

だけど、その違いが魔女にはわからないらしく、非難の目を俺に向ける。

なぜこいつは被害者面をしているんだ？そもそもお前が俺に喧嘩を売らなきゃこんなことにはならなかった。

お前が売った。俺が買った。

ただそれだけの話のはずなのに、不純物を大量に混ぜやがる。

単純明快な話だろう？俺はかかる火の粉を振り払っただけだ。ただ、それだけのことだ。

「かつて貴方ほどに自己中心的な人を私は見たことがありません」

「意志の薄弱な雑魚ばかり見てきたんだな。せいぜい拝め。俺こそが男の中の男だ」

「もう黙って下さりませんか？不愉快極まりないです。ついつい握り潰してしまいそう。貴方の小さな命を私の小さな掌で押し潰してしまいそうです」

魔女の小さな手の中には俺の息子がいる。

唯一無二の いや、二個あるから無二とは言わないか？まあそこからへんの違いはどうでもいいとして、とりあえず魔女に俺の命も言うべき急所が掌握されている。

だけど、それが何だ？

俺はゆっくりと歩き出す。余裕を持って歩み寄る。彼我の距離は10mもなく、その気になれば一瞬で詰め寄ることもできるが、あえて俺はゆっくりと、ゆっくりと歩を進める。

「だから、動かないで！」

何が、だから、なんだ？

お前は何を必死に叫んでいる？

それが俺にはわからねえ。

なんで俺が息子を人質にとられているだけで立ち止まらなきゃいけないんだ？全くもってわからねえ！

「心に刻んだ言葉がある」

決して勝てない相手に立ち向かう奴らはいつも笑いながら、勝てないとわかっていても笑いながら戦地へ赴いていった。

カシムは強いからいいよな、って苦笑しながらそいつらはその言葉を最後に二度と会わなくなっていた。会えなくなっていた。

「動かないでって言うているでしょう？潰しますよ?!」

死ぬのが怖いと震えながらも前進していく奴らを俺は知っている。死の直前に泣き喚きながら後悔の念を叫ぶ奴らを俺は知っている。それでも、最後には、逃げなくてよかったなあ、と笑いながら逝った奴らを俺は知っている。

そいつらは決まって同じ台詞を言ったもんだ。

「失うことを恐れていたら、何も手に入れることなどできはしない」

逃げれば命は失わなくて済んだのに、と俺は思う。

けど、今ならそいつらの気持ちがわかると思う。あいつらとわかりあえるんじゃないかなあ、なんて柄にもなく考える。

「貴方は」

そう たとえ、それが俺の息子を失うことになるうとも俺が男であるという事実は揺るがない。

「人の話が」

それでも、やっぱり失うことが怖い。とてつもなく恐ろしい。俺が今まで生きてきた中で、最たる恐怖を軽く凌駕するほどの悪夢を目の前にして、正直なところ、生きた心地が全くしねえ。だから

「聞けないのですかアアアア?!」

視界が滲む。

ブギョ、という擬音が俺の息子から放たれるのを聞いて、俺の視界が曇っていく。

だけども、今は立ち止まる場面じゃねえ。泣いていい場面じゃねえ。今はやれることをやるしかねえんだよ。

前に進むしかねえんだよ!!

「返してもらおう。それは俺のお稲荷さんだアアアア !【カイゼル・フォルヴァー】!」

2・5・魂の叫び(後書き)

よければ感想くださいorz

## 2 - 6 結末はいつも予想外

「一つだけ確認したいことがあります」

やる気満々の俺に水を差したのは目の前で息子を握り締めていた魔女だった。

もう意味がないですね、と呟いて息子は掻き消える。  
それもただの幻覚だったってのかよ………。

「何だよ」

「貴方はなぜ、そこまでして必死になれるのですか？」

私にはどうしてもわからない、と魔女は言う。

美貌を歪めて、おぞましそうに、理解できないと訴えるかのように魔女は言う。

「お金を払えば脱いでくれる人だっているでしょう。それだけ強ければお金には困っていないはずですよ。というよりも、それだけ強ければ女に困ることすらないでしょう。それなのに、何故　こんなところまで来て女風呂を覗こうというのですか？」

「決まってるんだろ？」

俺はそんなことに疑問を持つ魔女の思考こそがわかんねエ。

世の中いっぱいいいんだろ？他人がくだんねえと思うようなことに命を懸ける奴がよ。

まあ俺の場合は命に値する理由だと心から胸を張って言えるがな。こそこそ隠れたりせずに、堂々と真正面から叫んでやれるがな！

「そこに美女がいるからだ！」

「もしかしたらいないのかもしれませんが。それなのに、保証もないのに行くのですか？」

「保証って何だ？そんなもの人生にあるのか？仮にあったとして、それは何かしらのレールに沿った生き方だろ？俺には合わないねえし、何よりやりたくねえ。俺は俺のやり方を貫かせてもらう」

今まで生きてきてよ 保証のあるような気楽な道なんてなかったぜ？

そんな安寧な人生はなかったぜ？

常に死と隣りあわせだ。好きで危ない橋を渡るわけじゃねえ。ただ、いつも俺のやりたいことが危険なことが多かっただけだ。

今回もそうだったってだけなんだよ。

「やりたくないとは言っても、貴方のつまらない欲望のための人生よりはよほど有意義なものだと思いますよ」

冷静にそんなこと言うんじゃないよ。

それはお前の価値観だろ？お前の理屈をよ 俺に押し付けんじゃないよ！

「人の生き様 否定すんじゃないよ！テメエはいったい何様だ？」

「さあ？様付けで呼ばれたことはないのだから」

長い髪を掻き揚げるように言う姿は美しいが、ただのむかつ

く女にしか見えねエ。

ああ、そうか。コイツは敵なんだから、そうだよな。

敵だからムカツクのか、それともムカツクから敵なのかはわかんねえ けどよ。どっちにしても忘れちゃいけないことがある。

「そついや、テメエから名前を聞いてなかったな。闘う相手の名前くらい知っておきてえ」

「ラエリ。もつと長い名前もあるのですが、人は私をラエリと呼びます」

「フフ、ハハハ、ラエリか。知ってるだろうけどよ。あえて名乗らせてもらうぜ。俺の名前はカシム。ただのカシムだ。覚えていて損はねーぜ？」

全身に力を漲らせていく。

俺の【闘気<sup>オーラ</sup>】に反応するかのようにケルベロスが叫ぶ。

ルオオオオオ！

遠吠えのような嘶き。

それは決戦の合図としては十分だろう。

魔剣を構え、微塵の隙もなく身体をコントロールする。

はつきり言ってボロボロだ。

正直痛くないところを探すほうが難しいってくらいに慢心相違だ。けどよ 退いちゃいけない時つてのがやっぱあるんだよな。

「お前に敗北を与える男の名前だ。心に刻め」

「ええ、刻みましょう。貴方の心に敗北を」

それは魔女　ラエリにとっても同じだったようだ。  
やっぱよお。退けない時つてのがあるよな。

今はお互いの正義をぶつけあってんだ。信念かけてやってんだ！  
だからこそ、互いに否定する。  
だからこそ、俺の心は昂ぶっていく。

「いちいちムカツクアマだなあ。いい加減ぶっ飛ばすぞ？」

「いちいち下品な野郎ですね。その臭い口を塞いであげましょうか？」

口の減らないラエリの口頭は丁寧ではあるが、清潔さは既に保たれていない。

ああ、そうだ。お前ももうやる気なんだろう？

一切の迷いすらなく、俺をぶっ飛ばすつもりなんだろう？！

「テメエは俺の目的を馬鹿にした」

「貴方の存在は私を不愉快にさせます」

見ればわかるぜ。

お前の目ははつきりと俺を捉えてる。

拳は握り締められて、今にも飛び掛ってきそうなほどの力強さを  
感じるぜ。

だからよ、遠慮はしねえよ。

「徹底的に潰してやる」

「私が闘うつつもりはなかったのですが、二度と変な気が起こらなく

なるように命を絶つ必要があるようです」

俺のとおっておきを見せてやるよ。

【闘気<sup>オーラ</sup>】を爆発させて一気に加速する“必殺”が信条の俺のとおっておきをよオオオ！

「喰らえ　これが俺の一撃だ！」

「喰らいなさい　これが本当の幻想というものです　【自殺願<sup>アポトーシス</sup>】――！」

ラエリの叫びとともに俺の目の前には今まで見たこともないような、全ての魔獣の良いところだけを集めたような異形が現れた。

召還術か、それとも幻覚かは全然わかんねえし、わかる必要もねえ！

ルオオオオオ！

そうか、ケルベロス。お前もそう思うかよ！  
今だけは気が合いそうだな。オイ！

グオオオオオ！！！！！！

加速された俺という弾丸は決して止まることを許さない。

目の前にいる異形は大きく、太く、強そうだ。

真正面からぶつかるのは正直キツそうだ。

だけどよ　俺のとおっておきを出すんだぜ？

それだけじゃ足りねえよ！

「あんまり俺を舐めるんじゃないねえ　【電光石火<sup>フルチャージ</sup>】――！！！！！！」

俺の身体は【闘気<sup>オーラ</sup>】に包まれて、異形へと突き進んだ。  
異形の強大な腕によって受け止められて、その衝撃で意識を失い  
そうになる。

全身がもがれそうで、千切れそうで、死にそうになる。  
それでも俺は妥協したくねえ、俺は死体じゃねえってことを証明  
する！

絶対俺は退かねえんだ！

「ウオオオオオオオ！」

俺が雄たけびをあげる。

諦めないぞ、と必死に叫ぶ！

「ハアアアアアアア！」

呼応するかのように、ラエリもらしくもなく叫んでいる。

お前も必死なんだろうな。俺も必死だ。

この異形はとてつもなく強エ。力じゃ勝てそうにねエよ。

今も競り合いで負けて 踏ん張ってはいるけど、後ろに押し戻  
されていってるよ。

強え マジで強え！

それでも俺は諦めることを知らなくて

「俺の」

漲らせていた力を一気に0にし、俺は一步退き

「勝ち」

押し戻す力を失い、体勢を崩し、前のめりに倒れてくる異形に向かつて

「【カイゼル・フォルヴァー】アアアアアッ！」

思いつきり魔剣を振り放った。

「そ、そんな 私の負け、ですか？」

何の悲鳴もなく、あっさりと消滅した異形は果たして砕け散ったのか、それとも消滅したのかはわかんねえ。

幻覚だったのか、召還だったのかは知らねえが、お前は間違いなく強敵だった。

まあ、俺のほうが強かったわけだがな。

残るは自分の守る術を失ったラエリのみ。  
ペタン、と足が崩れて座り込むラエリのみだった。

「カツ、ハハハ、どうだ。どうだよ？俺の一撃はよお 最高だったろ？」

息も絶え絶えに俺は言う。

正直限界だったけど、油断を見せるわけにはいかねえ。

つと、あれ？何か力が漲っているぞ。

身長が高くなり、寂しかった股間も元に戻ってる。

これは ツ！

「つと、身体が男に戻ってんなあ？お前、もう幻想を維持できるほど力が残ってねえんだな？」

「く、何たる屈辱 生き恥を晒すつもりはありません。殺しなさ

い！」

そんなこと言われてもよ。

「女を殺すのは趣味じゃねエんだよ」

「私に生き恥を晒せと言うのですか！」

「ああ、別に殺すほどのことじゃねエ。死ぬほどのもんじゃねエ」

「ならば 舌を噛み切つてでも！」

口を大きく開いて歯を剥き出しにしてラエリは言う。

自殺をするというのなら、俺も止める気はなかった。

だけど、止めたい奴はいたらしい。

バシャアン、と豪快な水飛沫を撒き散らせながら全身金属鎧のおつさんが湖から飛び上がってきた。

飛び上がった勢いでラエリの横まで来るとおっさん ハイゼル

はおもむろにラエリの手を掴んで、言った。

「止めてくれっ！」

「は？」

「俺はお前に惚れた。一目惚れだ！」

「あ、いえ は？」

ラエリはきょとんとしている。

俺もいきなりそんなこと言われたらそうなるだろうなあ、と何と

なく考えてみた。

「【魅了<sup>チャーム</sup>】解いてるよな？」

「え、ええ」

本気で焦っているのか、その目は泳ぎ、俺に対して助けを求めるとかのように潤んでいる。言わせてくれ。俺を見るな。俺だって訳わかんねえんだ。

つうか、あれほどのゴツイ鎧装備してるのに陸まで上がったのか。すげえな……。

またもや、先ほどよりは小さな湖から何かが出てくる音が聞こえてくる。

出てきたのはクライツだ。陸に上がるなりわしゃわしゃと頭をかき乱し、ハイゼルのところまで走っていく。

「父さ ハイゼルさん！みつともないことは止めてください！あ、カシムさん。先ほどは失礼しました」

「お、おう。お前も無事だったのか。さっきのはまあ、魔法にかかってたんだし仕方ねえよ」

あれは不可抗力だろ。うん。

「この恨みは忘れませんので首を洗って待っていてください」

「……………」

「名前をお聞かせ願えませんか！」

「ラ、ラエリですけども」

その間にも話は進行しており、ハイゼルがラエリに求婚し、ラエリが俺に助けを求めるように見て、俺はそれから目を逸らし、クライツはハイゼルの止めているという状況だ。

意味わかんねえ。

「では、行きましようか！」

言うなり、ハイゼルはラエリのことをお姫様抱っこした。

どこを触っているんですか！とラエリは結構本気で怒って抵抗しているが、魔力のない魔女などそこらの町娘と変わらない。その抵抗は全くの徒労に終わっているようだ。

俺こんな奴に苦戦してたのかよ……。

「善は急げ！クライツ、この依頼は放棄だ。急いで教会へ行くぞ！」

「本気なんだね。わかったよ」

何がわかったんですか！とラエリは叫ぶ。哀れだ。

「あ、あの 私の意志は？」

抵抗する力も失ったのか、俺に助けを求めることも諦めたのか、その目は全てを悟ったような 賢者のような枯れた目になった。

あまりにも哀れだったので、幸せにな、と言ってやると凄まじい勢いで睨まれてしまうが、俺は空に浮かぶ自由な雲を眺めることに集中しなければならなかったので睨まれたことに気付かれないフリをした。

「では、カシム殿。それでは！」

「カシムさん、また会いましょう!!」

「ああ、戦士カシムはお前らのことを心から祝福するよ」

そして、3人組は森の外へと向かっていった。

その姿を見送った後、俺は混乱から己を取り戻すかのように雲を数分見続けて、太陽を見た。

太陽の位置からしてもう昼過ぎだ。もうあと少しで秘湯まで辿り着くし、よし！

「気を取り直して頑張るかぁー」

いつの間にかケルベロスは普通の皮の胸当てに戻っていた。  
何となくそのおかげで安心した。

2 - 6 結末はいつも予想外（後書き）

信じられますか。

この展開でプロット通りなんですよ。

このプロットを書いているときの自分の頭の中を覗きたいです。

3 - 1 空から降ってきた(前書き)

馬鹿は恐れず前へ行く

満身創痍で前へ行く

何を求めて進むのか 何を求めて彷徨うのか  
そこにあるのは希望か それとも絶望か

答えは未だ見つからず

馬鹿はただただ進むのみ

### 3 - 1 空から降ってきた

「う、うううううッ！」

身体に刻み込まれたダメージは深いらしく、戦闘が終わって緊張感が薄れてきたとき、痛みで狂うかと思った。

近くにある木々によるめいて手をつく。立つのも辛い。これほどまでにボロボロになるまでに俺は踏ん張っていたのかと思うと誇らしい。倒れちまえよ、と俺の中の弱さが囁いてくる。倒れてたまるか、と俺の中の強さが叫んでいる。

ギリギリ、と歯を軋ませるように耐えて、耐えて、何とか踏ん張ってみる。

ボギヤツ、と何かが破裂する音が手からした。力を加減することができず、木の幹を握り潰してしまっただらしい。

「ハハ、ハハハ、痛え　　痛えよ。たまんなく痛え」

確認するのも億劫だが、長年に渡って戦闘ばかり繰り返したせいで、自己の身体の状態を分析するということが既に習慣になってしまっている。

現状認識を正しくした結果、わかったことは“俺の身体は結構ギリギリだ”ということだ。さっきの戦いで無理やり力を強化し、かなり無駄をしたので筋肉の繊維がボロボロだ。断裂しているところもある。骨だつて輝だらけだ。一步足を踏み出すたびに痛みで目がチカチカするし、右手に関しては既に神経が域届いていないのか、動きはするが痛覚はない。たまらなく不安になるが、自分の決めた道だ。後悔だけはしたくねえ。

森の中を進むにつれ激戦の傷跡が見え隠れしている。

ミノタウロスなどの魔獣は自分の縄張りだと主張するために木に

傷をつけたりするが、傷と表現するには生易しすぎる亀裂がそこかしこにある。

飛び散った血肉もあるし、鎧の残骸もある。べったりと何かがついた骨だつて転がっている。おそらく

「チツ」

情報を流したのは俺だ。だから、これは俺のせいでもある。責任は俺にもある。結局は森に挑戦したこいつらの自己責任だろうし、俺は微塵も悪くないんだが、センチメンタルな気分させられるのは仕方のないことなのだろうか。

引き摺って運ぶカイゼル・フォルヴァーを見る。もともとは綺麗な白銀だった刀身は血に塗れて赤黒く滲み、魔剣らしく禍々しいオーラを放っている。すっかり手にも馴染み、武器にこだわらない俺でもこの剣なら一生を遂げてもいいと思えてしまうほどだ。

「らしくねえな。カシム。俺は俺だ。迷う必要なんざねえんだ」

先に進むしかねえんだ　　呟き、俺は更に前へと進んで行く  
行こうとしたんだが、空が翳ったのを不審に思い、空を見上げた。

頭上に立ち上る燦々と降り注ぐ太陽は元気いっぱい輝いていて、それ自体に不思議なことはなにもないのだが、一瞬だけ日光が遮られたのだ。

遮ったものは空を飛ぶ黒い影。大きな蜥蜴に翼を生やしたような影だ。

そこから不思議な声が聞こえてくる。

「待つて！止まりなさい！死ぬ！落ちる！振り落とされる！シユリ  
ファ！私の言う事が聞けないの？！聞いて！耳を傾けてエエエエ！」

というかなり切迫した甲高い少女の声に返事するかのように、クギヤア、とその大きな蜥蜴は答えているようだ。

大きな蜥蜴 あんな生物はドラゴン以外にありえない。もしくはワイバーンだろうか。しかし、ワイバーンは成体となってもあそこまで大きくないはしない。

いくらブルツシユリウムの森といえども、ドラゴンが住んでいるなんていう話など聞いたことはない。

ここから見える大きさだけではいまいち全容が掴めはしないが、未だに成長しきっていない幼竜のように思える。それが、もしくは成体はかなり小さいドラゴンパイパーなのだろうか。

それは何なのかは知らないが、果たして 喚いていた少女は空から降ってきたようだ。

「あああああああああああああ！」

劈くような悲鳴。まさに真上から聞こえてきて、避けるにしても俺の身体は言う事をきかず、格好よく助けるわけにもいかず、ただただ頭上を注視するしかなかった。

近くなるにつれ見えてきたものは、俺と同じく、ここらでは珍しい黒髪の、涙やら鼻水やらを流しながら叫び続ける少女だった。

頭から地面に落ちてきている。地面と接触したら間違いなく逝くだろう。

助けるしかないのか、と少しばかり逡巡する。

俺の身体はボロボロで、歩くのも辛い。それなのに無理に受け止めるというのはかなりの激痛が走りそうだ。だけど、少女を見捨てるというのは性に合わない。

だから、泣きそうになるほどの激痛が身を襲う覚悟を完了させてから、俺は少女を受け止めた。

「ッ！」

受け止めた衝撃によって俺の全身に　　まずは強烈な電流が流れた。

そして、一瞬の静寂　　後に進む激痛！重力によって加速度的に上乘せされた体重を両手で受け止めた代償は重く、腕は悲鳴を上げ、足はガクガクと震えており、全身から嫌な汗が噴き出してくる。

格好よく受け止めることなどできるはずもなく、俺の身体はただただ“休息”を求めるばかりだ。

痛みを我慢して震える俺はギョツと目を瞑って、歯を食い縛り、がつしりと少女を抱きとめていた。そこにエロイ欲求などなく、完全に不可抗力でしかなかった。

「あ、あの　？」

腕の中で先程受け止めた少女が困惑気味に声をかけてくる。

でも、返事をする事ができない。口を開いたら弱音を叫びそうだ。弱音を叫ぶ　　？俺の頭は今、かなりおかしい状況にある。冷静に考える事すらできない。だが、ん、これは　　！

「あの　ッ！」

痛みがやわらぐ感触が手に広がっていく。

むにゅむにゅとした柔らかい物体が確かに手の中にある。目を見開くと俺の手は確かに少女のケツを撫で回していた。

フリーダムに動き回る俺の右手は先程まで感覚がなかったはずなのにも関わらず、今は癒しを求めて動き回る。感覚は復活していた。俺の右手は進化を遂げ、神速の域に達するほどの動きを体現していた。

「受け止めてくれたことは感謝します　　ですけど、やめてください

「いませんかつ!!」

聞く耳持たず、という言葉は確かにこのときに使うのが相応しいのだろう。

未知の感触に酔い痴れた俺の多幸感は決して止められることはなく

「やめてくださいって言うてるでしょうがっ！」

再三の忠告を俺の耳は聞き流した。

それ故か 名も知らぬ黒髪の少女はいきなり武器を取りだした。何も持っていないかつたはずの右手にはいきなり小振りの槍 パイクが出現し、俺の首元に突き付けてきた。

「感謝していただきますので、最後の忠告です。離してはもらえませんか？」

「嫌だ」

迷わず言った俺は思いつきりパイクの柄でどつかれた。

聖ブリュナーゲルの王家直属の親衛部隊 聖竜騎士団。

英雄譚でしばしば出てくる庶民の憧れ。騎士の最高峰。絶対的な正義の象徴。

単純な戦闘能力も、魔法能力もあり、何より著しく高い空間把握能力がないと絶対になれないと言われている。まさに騎士の中の騎士、エリートの中のエリートがなるのが聖竜騎士団だ。

聖竜騎士団のみ白銀の鎧を纏うことは許されており、胸元には紋章である紅十字が刻まれている。

目の前の少女は白銀のバイクを手に持ち、白銀の鎧を纏って自慢げに語る。

「私は新入りではありませんが、聖竜騎士団の末席に名を連ねる者ですっ！」

誇らしげに張られた胸元は、銀竜騎士団特有の少しばかり薄い白銀の鎧を纏ってはいるが、膨らんだ胸元を見る限り、それなりに発育が良いということが窺える。

さて、まずは胸を見た後に顔を見るのが俺のポリシーなのでしっかりと顔を凝視してみた。

俺と同じ黒髪ではあるが、ろくに手入れしていない俺とは違って艶やかな髪は後ろで束ねられて可愛いポニーテールとなっている。

肌は外での修練の賜物か、健康的に日に焼けた小麦色。にっかりと笑うその姿はまさに健康優良児といったものだ。これを見てまず俺は、元気そうだな、活発そうだな、といった印象を持った。

身長は平均よりも高いのだろう、俺より頭一つ分小さいくらいではあるが、俺がかなりの高身長なので、女にしてはかなりのものだと思う。よく鍛えられているのか、背筋もピンと張っており、鍛え抜かれた肢体がそこかしこから覗き見える。

覗き見えるというのはアレだ。騎士のわりにはこの少女はなんというか 露出度が高いのだ。白銀の鎧は今まで見たことのある騎士と同じような形状 鎧というより俺と同じく胸当てのようなものだが ではあるが、下半身が防御力皆無であった。太股すら満足に隠せないような短さの紺青のプリーツスカート。そこから垣間見える美脚は俺の視線を釘付けにした。

「先程の無礼は許しましょう。上空から落ちてきた私のほうがかなり失礼だと思えますし」

言うなり目の前の少女はパイクを一振りし　消し去った。

消えた手　右手の中指に残ったのは先程まではなかった小さな赤い宝石を宿す指輪だった。

なるほど、そういう系統の武器というわけか。

世の中には魔剣やら聖剣やらがいろいろな伝説とともに保管されている。それらの共通点は”人ならざる者の手で造られた”というものだ。

しかし、この少女の持っているものは違う。持ち運びに便利なように”人の手で造られた”ものだ。こういうものを名剣という。この少女の持つものは槍なので名槍になるのだろうか。

「ところで、自己紹介がまだでしたね」

踵をつけて少女は引き締まった表情を作り、まるで騎士のような礼儀作法をした　つか、自分で騎士って言ってたし。

そんなことを思っている間にもきはきとした口調で少女の口頭は続く。

「私の名前はミハエル」エウレ」ラスベルグ。聖竜騎士団の末席に名を連ねる騎士です」

「俺の名前はカシム。ただの冒険者だ」

「カシム？聞き覚えのある名前ですね……」

そのまま少し黙り込むミハエルではあるが、うん、あまり思い出すな。聖竜騎士団相手に揉め事を起こしたことは数知れない。

こいつが新入りで良かった。もし顔見知りだったらいきなり斬りかかれる恐れすらある。

依頼があれば俺は誰とでも事を構えるからな。うん。よく揉めたよ。本当に。だから、正直に言うのも面倒なので、それに俺は今戦える状態じゃないので誤魔化すことにした。

「人違いだろうよ」

「でしょうね。私の聞いたことのあるカシムという人物像では他人を助けるような博愛精神はありません。人違いでしょう」

否定はしねえけどよ。初対面の奴に言われるとなんつか、ムカツクな。「貴方はきつとエッチな人でしょうけど、助けてくれたので善い人です」とか言われても複雑な気持ちになるだけだぜ。

「ところで、なんでこんなところにいるのですか？」

「道に迷ったんだよ。人生という名の道にな……」

「は、はあ。そうですね。それは大変そうですね。迷ったのならこんな森に来られずに教会で祈りを捧げることをお勧めしますが？」

「祈るべき神には「手遅れです」と言われてるんだよ」

「神に見捨てられるとは　どんな人生を送ってこられたのですか？！どうやって神と会われたのですか？！」

「まあ人生いろいろっつーことで。ところでアンタはなんでこんなところ？」

「初任務に遅刻

いえ、寝過して急いでシユリファ

先程のド

ラゴンですが。乗って来たのですが、朝ごはんをあげるのを忘れてたから怒っちゃって、まあ落されました。ちなみに初任務というのは

「ブルツシュリウムの秘湯の防衛か？」

「まあ、そんなところです。ああ、ただでさえ遅刻なのに、今日中に辿り着けるかどうかすらわからなくなりました。どうしましょうか……」

とりあえず思ったことがある。こいつかなりのドジだ。仕事に遅れるなんて冒険者ですら許されねーよ……。信用第一の家業だから時間は絶対厳守だ。騎士も同じのはずなのだが、なんとなくわかることもある。

ミハエルはブルツシュリウムの森に落とされたにも関わらず、心配しているのは任務のことについてだけだ。ブルツシュリウムの魔獣を全く恐れていない。腕にかなりの自信がないとこんな態度はとれない。ドジ成分を補ってあまりある実力で聖竜騎士団に入団できたのだろうか？

立ち居振る舞いを見る限り、強いのはわかるが、そこまで圧倒的というほどでもないように思える。

「あの　じろじろ見ないでくれませんか？」ともじもじと身体をよじるミハエル。

おっと、いつの間にか脚に目がいつていたようだ。セックスアピールすぎるだろう。俺は悪くない。悪いのは見せつける女のほうだ！けど、なぜか世界は男がエロイから悪いということになる。俺はこのことについて異議を唱えたい。

まあ、そんなことはどうでもいいとして　。

「気づいてるか？ 囲まれてるぞ」

あれだけ大きな金切り声をあげたのだ。魔獣に取り囲まれるのは当たり前というか何というか。

周囲に林立した樹木の隙間からは獰猛な視線が突き刺さる。

先程まで闘ったりしたミノタウロスやらオーガ。それに上空にはワイバーンがいる。

俺 もう終わったかな、なんて諦めの言葉が口から洩れるが、ミハエルはそうでもないらしく、余裕の体でパイクを取りだしていた。

「魔獣掃討の任は受けていないのですが、身の安全を図るためなら致し方ありませんね」

などと言いながらパイクを構え、舌舐めずりしている。明らかにバトルジャンキーだ。今まで見たことのないタイプの異性を見て俺は戸惑うしかない。

「怪我人の貴方は下がってください。こいつら程度、私一人で十分です」

言うなりミハエルは魔獣の群れに飛び掛かっていった。

飛び掛かるのはいいが、上空から飛来するワイバーンには気づいていないようで、仕方なく俺は相手をすることにした。

「痛え」

ぼやく。

上空からワイバーンは【火炎の吐息<sup>ファイアブレス</sup>】を放ってくる。その数は二つ。つまり二匹のワイバーンがいるということ。

計二つの攻撃を俺は半身を反らすだけでぎりぎり回避し　ぎりぎりすぎて火の粉が当たって腕が少し焦げた　空に舞う　ときに魔剣を地上に忘れた。なんてこった！

近くに可愛らしい女の子がいるので醜態を晒すわけにはいかず、武器もない状況だし、即座にお家に帰って枕を濡らしたい気持ちでいっぱいなほどの激痛を無視して無理やりに身体を駆動する。

ケギヤアツ！

滞空する俺に一匹のワイバーンが牙を剥いて襲いかかってくるが、大きく開いた口の中に手を突っ込んで舌を思いつきり引きぬく。

ギヤアア！と絶叫をあげるワイバーンは涙目になりながら俺を睨むが、俺だって涙目なんだ。これくらい許せ、と考える。

その間にも後ろから別のワイバーンが迫ってくるが、今相手している奴の鼻っ柱を思いつきり足蹴にして跳躍する。

俺を狙った奴は勢い止まらず、開かれた口はカチン、と硬質な音を立てて閉じられた。噛まれたのはワイバーン。噛んだのはワイバーン。これこそが共食いというものか。

「せいやっ！」

空から見下ろす地上では男らしい掛け声とともにバイクが突き出されていた。

突き出された先にはミノタウロスの巨躯。

グオオオオオ！

と悲鳴を上げている。

だけど、たった一度の刺突では息絶えなかったようで、怒りに満ち溢れた一撃をやり返しているが、全てを流麗な動きでミハエルは回

避していく。

木々を上手く使いながら、かわし、いなし、受け流している。それはまさに軽戦士の教本そのままの戦い方だった。これほどまでにハイレベルな動きを体得しているとは 天才というものだろうか。自分より大きく、強い敵と戦うというのは勇気があるものだ。見る限り、ミハエルはミノタウロスやオーガの3体に囲まれている。手助けをしてやりたいとは思うが

ケギヤアツ！

ミハエルの動きに見惚れている間にワイバーン二匹は再起動したようで、怒り狂った様相で俺を睨みつけていた。

片方は俺に【火炎の吐息】<sup>ファイアブレス</sup>を放ち、片方は俺が落ちていく先で待ち構えている。

俺は滞空するための体勢から素早く降下するための体勢にシフトし つまりは頭を下にして【火炎の吐息】<sup>ファイアブレス</sup>が来る前に落ちた。

俺の足元を不吉な炎が通りさっていくが、しかし、目の前には口をカパツと開けた憎々しいトカゲ野郎。

「学習しろ」

言いながら俺は手を口の中に入れようとすると、サツと口を閉じた。

かかった！と思う。

手を噛まれないように引いて、その顔面に手を置き、体重が全て乗るように勢いよく膝蹴りをぶち込んだ。

苦しそうに呻くワイバーンはもうかなりの涙目で、悲鳴をあげているが、そんなものは聞こえないふりをして背中に飛び乗った。そして、首を絞めた。

助けようともう一匹が駆け寄ってくるが、その前に首の骨を折る。

ゴキツ、という骨が折れるとき特有の残酷な音が流れた。

ギヤアア！

てめえ、よくも！と人間なら言っているのだろうな、と思う。

仲間を殺されて本気で怒り狂っているようだ。

勢いそのまま俺に向かって口を開けているが、本当に学習しない奴らだ。顔真つ赤なんだろうか。

死体となった落ちていくワイバーンの背を蹴ってもう一匹にすんなりと飛び乗って　そいつの骨も叩き折る。

魔剣がなくてもどうにかなるもんだな、と不意に思ったが、今考えるべきは着地をどうするかだ。

正直なところもう全身いろんところがやばいので、これ以上無理はしたくない。だから、ワイバーン二匹をクッションにするように折り畳んで、そのまま地面へと落下した。

ゴギユツと肉が潰れる音が木霊する。

「えげつない戦い方ですね……」

その間に既にミハエルは戦闘を終えていたようで、死体が三体ほど並ぶだけだ。

全身穴だらけのこいつらも結構可哀そうな死に方だとは思っが。

「武器を地面に忘れたんだ。仕方ないだろ」

言つなり俺は地面に落ちていた魔剣を背に担いだ。

魔獣を素手で仕留めるなんて　と凄く不審な目で俺を見てくるが、どういう意味だ。それ。

しかも、なんか吐きそうになってるし。首を折るのは人間相手に

も有効な戦術だろうが。

「いえ、戦い方は自由ですよ。それにしてもお強いのです。こんなところでなければ、こんな状況でなければ手合わせ願いたいものです」

「そうかい。俺は遠慮しときたいもんだ。面倒臭いしな」

「そうですか　ところで、カシムさんと仰いましたっけ？このままどこへ進むのですか？」

「ああ、ここを真つすぐ進むつもりだ」

指差す方角はブルツシユリウムの秘湯への行き道。

「何故そつちなんですか？出口は反対でしょうに。そちらは森の中心地ですよ」

「人生という名の旅路は困難な道を行かなければならないものなんだよ」

「はあ、よくわかりませんが、行くというのなら一緒に行きませんか？目的地は同じようですし、カシムさんは強いので一緒にいると心強いです」

「ああ、いいぜ」

そんなこんなで臨時のパーティを組むことになった。

考えれば聖竜騎士団の奴と一緒に組むってのは初めてのことかもしれない。

「よろしくお願いしますね」

まあ、最後には敵になるんだろうけども。

その時の対処策を考えながら、俺は「よろしくな」と言って右手を差し出した。

女との握手はこれが二回目のことだった。



### 3 - 2 カシムの紳士な振る舞い

発狂しそうなほど興奮しているわけではないが、常に下腹部に力を入れていないと持って行かれそうだった。

林立する木々を歩きながら数え、それでも高鳴る鼓動を抑えることができそうにないので頭の中に必死に思い浮かべた。男の裸を。

屹立していた元気な息子は役目を終え、従順な屍となり、俺の鼓動は収まっていった。逆の意味で冷や汗が流れてきたが。

そのように不謹慎極まりなく、不審者全開の俺に何かしら思う事があるのか、露出度高めの武装をしたミハエルが声をかけてきた。

「大丈夫ですか？」

心配そうな声音が響く。

ああ 木漏れ日が眩しい。下半身へ必要な血流が向かったのか、失血気味の俺は眩暈を起こす。あまり俺を心配しないでくれ。俺に構わないでくれ。

敵になるとわかっていても、敵になると確信していても、惚れてまうやろおおおおお！

「ああ、大丈夫だ」

などと思っていることなど億尾にも出さず、クールに対処するよう努めるが、やや前傾姿勢になっているのは致し方ないことだろう。だって、ほら。俺って男の子だし。

盛り上がるテンションと盛り上がる何処かを必死に抑えようとしながら、俺は前を向いて歩いていった。

森の中、女の子と一緒に歩きながら俺は何をやっているんだろう、と泣きたくなる。

前傾姿勢になりながら、魔剣を引き摺り歩く姿はかなりダサイ。

「重いのなら持ちましようか？重傷を負ってるように見えますし…」

優しく言われる。

どんな攻撃でも耐えきる自信があるし、どんな罵倒でも受けきる自信がある俺だが、滅多に優しくされることはない。温かい声は俺の心に直撃だ。

「いける　まだ、いける！」

何がいけるのか、と自分自身不安になるが、俺は何も間違っではないはずだ。いけるんですか、とミハエルは呟くが、ああ、俺は今なら天にすら逝ける。こんな死に様も悪くはねえ。

「ところで、カシムさん。持っている剣を見る限り名のある方だと思つのですが、本当にあのカシムではないのですか？」

「俺じゃあないな」

「そうですか。残念です。もし本人ならば是非お手合わせ願いたいところなのですが」

本当に残念そうに呟く。

地面を踏み締める靴音が少し深くなった気がした。そこまで闘いたいのは何故だろうか。俺以外にも強い奴などいくらでもいるだろうし、それに　戦いたがる女の気持ちが変わらねえ。

やっぱり花を愛でる女のほうがいい、なんて思つのはおかしいのだろうか。

俺の好みはいいとして、俺がどんなふうに使われているのかも気になる。実際どんな風聞なのだろうか？

「ちなみにその有名なカシムってのはどんな奴だ？」

できるだけ不自然にならないように声音を制御しながら聞いてみた。

そうですね、とミハエルは相槌を打つ。

「怜悯な眼差しとともに誰をも近づけない孤高の佇まい。かつ、身長も高く、鍛え抜かれた身体は見る者全てを虜にするらしいです。とにかく美形で、本当に格好いいらしいんですよー」

「憧れちゃいますよねー、という少しばかり蕩けた声で言われてもな。誰だよ、それ。どれだけ美化されてるんだよ。それに孤高じゃねえよ。友達がいないだけだ。俺の走りについて来れる奴がいねえだけなんだよ……。」

「装備するのは身の丈を超える無銘の大剣と浄化されていない穢れた魔獣の皮」

「んー？と間延びした声を出しながらミハエルは俺をじっと凝視する。そんなに見つめられると照れるだろうが。」

「身の丈を超える大剣に、魔獣の皮の装備してますよねえ？」

「無銘の剣じゃねえぞ。きつちり魔剣だ」

「ふむー？まあ聞く話によるとその人は武器にこだわらないらしいですからね。そのような禍々しい武器は手に取らないでしょう」

武器には確かにこだわらない。

何度か技を放つとだいたいの武器は壊れてしまっからな。

駆け出しの頃は武器を稼ぐ金すらもなく拳一つで戦ったもんだ。

そのたびに罵られたものだが、あれも良い思い出　悪夢でしかねえな。実際よくあんな恐ろしいことをやってたもんだ。

回想している間にも話は進み、それでですねー、などとミハエルはまだまだ俺の評価をしている。美化されすぎてて原型が残っていない。

「我が騎士団では大本当に人気でしてね。何度も争ったことがある先輩が言うには【抱かれない男No.1】だそうです。あの瞳で見つめられたらとても感じ　どうしましたか？」

どうしましたか、と言われてもな。

気分が悪い。抱かれない男No.1？抱いたことなんてないわけだが。俺が夜に抱くのは愛用してる抱き枕だけだ。それ以外のものを抱いたことはない。抱けるもんなら抱きてえけど、そんなことを許してくれる奴はいねえんだよ　ッ！

「まあ、カシムさんではなさそうですね。ところどころ似ている部分はありますが、孤高というようにも見えませんし。とてもフレンドリーですよ。震えながら歩くところなんてとても可愛いです」「失血のしすぎでフラついているだけだ」

その一言は見事にスルーされ、疑ってすみませんでした、と言われる。謝るのはそこだけでいいのか？

「あ、話は変わりますけどもカシムさんは彼女いますか？」

グサリ、と心に突き立つ言葉の剣。

聞きにくいことをあっさり聞いて人の魂を切り刻んでくる。あまり俺をいじめないほうがいい。

「いたらこんなところに来ねえよ」と吐き捨てるが「彼女がいるかど

うかこの森に何かしら関連性でもあるんですか？」と言われる。  
ああ、あるさ。とびつきりな。

「彼女ができなくて 人生の迷子になったのさ」

「いくら自殺の名所だからって自殺はよくありませんよ？いつか良い人が見つかります」

いつ自殺するなんて言ったよ。それほどまでに俺は世界に絶望してねえよ。

まだ俺はやれると信じてここまで来た。

少し視界が暗くなる。空を見ると太陽が雲に隠れていた。

遮られた光の中、周囲を見ると血生臭い風景。引き千切られた人の死体や、叩き潰された魔獣の死体 命のやり取りの傷跡がそこかしこに見受けられる。

そんな中で俺はこんなに緊張感がない状態でいいのだろうか。考える。

俺は何故ここまで苦労して来たのか、と。

「あの一？」

ミハエルのほうを見てみた。

ああ、そうか。俺は裸を見るために来たんだっただ、と思い出す。

そもそもは女風呂を見たいわけではなく、女の裸を見たかったんだ。

コイツは女だ。ああ、間違いなく女だ。

美脚はそそられるものがあるし、容姿だって整っているし、美脚は本当にいいものだ。そそられる。

不愉快な臭いのせいか、俺は妙に興奮し始めていた。

血を見ると 昂る。

失われた血のせいか、意識が朦朧としている。

ああ、もういいんじゃないかねえか？と心の中で俺が囁いている。

「あの一！」

意識が我に返る。

俺は今 何をしようとしていた？！

俺の顔を覗きこむように屈んで上目づかいで見つめてくるミハエルに 何をしようとした？！

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ 大丈夫だ」

初めては愛のある行為にしようと思っただろう？

金で買うこともできたけれど、やはり愛に生きようと 俺は決

断しただろう？！

襲うなんてのは言語道断、許されるべきことじゃねえ。

未だに心配そうに見つめてくるミハエルを押しつけて、大丈夫、と自分に言い聞かせるように何度も呟いた。

「 大丈夫ですか？」

可愛いなあ、などと思っしまいました。

ああ、でも、そうだ。ダメだ。

こいつは敵なんだよ 惚れたら結局傷つくだけなんだよおッ！

まどろむ意識は決壊寸前で、俺の理性も崩壊寸前で、俺にしては珍しく周囲の警戒を怠っていた。

遠くから聞こえてきているはずの大音量の何かが羽ばたく音。

聞き逃してはいけないはずだったが 致命的に俺は聞き逃していた。

「先輩！」

歡喜に震えるミハエルの声。

ミハエル！と答える慈しむような声。

気付いたときには遅く 空には竜を駆る戦乙女たちが立ち並んでいた。

「よかったです。先輩たちの中には治癒魔法が得意な方もいます。これでカシムさんの傷も大丈夫ですね」

そんな都合のいいことがあるかよ。

俺に気付いた聖竜騎士団の奴らは凄まじい形相で俺を睨んで殺気を放っている。

それに気づいていないのかよ。

「チツ」

知れず、舌打ちをしてしまう。

あと少しだったのに、どうして俺の努力は報われない。

俺に恋をしるなんて言わねえ、俺を愛しろなんて言わねえ、俺にときめけ、なんてことも言わねえよ。

ああ、でも、女と仲良く会話するなんて夢みたいない時を過ごせたのは感謝しよう。

良い雰囲気だったと思う。俺は実際、少しばかりときめいていた。

「カシムさん？」

くぐもった笑い声しか出てこねえよ。

呆れて物も言えねえ。

何に期待してたんだ？俺に恋してくれる奴なんかいるはずねえだ

る？今までいなかっただ。そう都合よくあらわれるかよ。

だからよお　だから覗くんだろ？

たとえどんな壁があろうとも、真正面からぶち壊してよ　覗くんだろ？

ああ　上空から優雅に降り立ってくる聖竜騎士団の連中は正しく壁だ。何人いるんだ？全員俺を睨んでる。武器を構えて睨んでる。

「先輩　？」

理解していないミハエルをよそに、聖竜騎士団の連中は優雅に大空から降り立ってきた。

### 3 - 3 敗北 そして

俺はかつてないほどの危機に陥ったことを客観的かつ主観的に分析した。

上空には十を超える聖竜たち、目の前には白銀の鎧を着た美しい女たち。こちらも十を超える。

手にもつ武器はそれぞれ違うが、最高峰のものであることはその輝きを見ればわかるというもの。

「カシム か？」

先輩と呼ばれていた一際背の高い女が俺に声をかけてくる。見覚えのある女だ。

「よお、しばらくぶりだな。名前は覚えてねーが、そのスタイルの良さは夢に出てくるほどだった。忘れたことなどありはしねえ」

ふん、と女は眉のあたりで切り揃えられた真紅の髪を掻き上げカシムに軽蔑の眼差しを向けた。  
ミハエルは展開についてくれないようで、一言も聞き洩らさないように現状の把握に努めているようだ。

「アレイだ。覚える必要などないぞ。貴様には恨みがある。我が主を辱めた恨みがな」

「主？あの騎士の王女さまのことか？」

「そうだ！だから、貴様を連行する。然るべきところで処断する！」

素っ裸にさせようとして結局裸にならなかったじゃねえか。

あのあと俺は3カ月ほど逃げ回ることになったんだぞ。その間に

何人の騎士をぶつ倒したことが……。

思い出しただけでも泣きそうになる。本当に辛かった。道行く女性に「変態のカシムよ」「王女様を襲ったんだってー」などと陰口を言われていたという事実は俺の心を引き裂いた。

心から啼いたあの夜　俺は皮剥けたんだ。

「てめえらの事情なんか俺にはどうでもいい」

あのとこのように逃げるといふ選択肢はある。こんなボロボロの状態でも逃げ切れる確信ならある。

けれど

「どけ。俺の邪魔をするなら　わかってるよな？」

担いだ魔剣を振りかぶり、地面に思いっきり叩きつける。

威嚇　ただの威嚇だ。

だが、これは威嚇たりえなかったらしい。見るからに満身創痍な俺を逃す気があるはずもなく、聖竜騎士団の面々は武器を構えて戦意の漲った瞳で俺を見ている。

「待って下さい」

唐突にミハエルが吠えた。

パイクを地面に突き刺して、騒音を奏でて大声を張り上げたんだ。

「私はあまり頭が良くないので事態を全て理解しているわけではありません。しかし、一つだけわかったことがあります。貴方は“あの”カシムなんですね？」

一番やる気満々なのはどうやらミハエルらしい。

俺を見る目は純真なものだ。騙したことは全く気にしていないよ  
うで、俺がカシムであるか、ということだけが大事らしい。

「そうだ」

ミハエルは顔を喜色満面になる。まるで玩具を見つけたときの子  
供のよう。

「そうですね。では、先輩。カシムを一番最初に見つけたのは私で  
す。先手は譲って下さい」

アレイは苦笑する。仕方のない子ねえ、と。他の面々も納得して  
いることからコイツはいつもこんな感じなのだろう。

そして、強さを信頼しているんだろう。手負いの俺に負けるはず  
がない、と。

「やりましょう」

突然周囲の様相が一変する。

空気が重くなったような、身体を支えるために力を踏ん張らなき  
やいけないような感覚。圧倒的強者だけが放てる圧力のようなもの。  
まじまじと目の前にいるミハエルを見る。

そのような圧力を放てるようには見えないが。 。  
すすつ、と俺の近くに歩み寄り、互いの手が届くほどの距離で立  
ち止まる。

「では、いきます」

ガチンコでやろう、ってことか。舐められたもんだ。

俺は男だ。女に負けるわけにはいかねえ。面子がかかってんだ。

弱みを見せれるはずもなく、俺は震えそうなほどに瀕死の身体を精いっぱい奮い立たせる。

「来いよ」

互いに笑い、攻撃を仕掛けた。

ミハエルの持つパイクはかなり短い。普通のパイクの半分にも満たない長さだろう。だが、そのおかげで隙も小さく、連続で突きを繰り返してくる。しかも、俺よりかなり身長が低いおかげで下から突き上げてくる形になる。至極、避け辛い。

「クッ！」

見えてはいるが、身体は反応せず、掠り傷を負っていく。

魔剣の腹で受けたと思えば、さらに追撃が来て、それをかわしたと思えば更に追撃が来る。怒涛の連撃。これがミハエルの戦闘方法のようだ。

「こんなものですか?! “あの” カシムはここまで弱いものなのですか?」

言ってくる。

満身創痍の俺に対してどれほどの期待をしていたというのか。

「ワイバーンを倒していたときの貴方は本当に格好良かった! 女だから手を抜いているとしか思えません 本気を出して下さいッ!」

それでも俺は黙して紙一重で避け続ける。

だんだんと癖が読めてきた。正確な突きを俺は腕でいなすことになっっている。軌道を反らすために横から衝撃を加えて受け流す。

「こいつ単純だ。攻撃パターンが少ない。

一撃で沈めてやる。」

「どうした？こんなもんか」

より一層の力を込めてパイクを迎え撃ち、弾き飛ばした。

苦悶の声をあげて衝撃を抑え込めなかったミハエルはパイクごと身体を持っていかれる。

「武器なんざいらねえな。素手でやってやるよ」

俺は魔剣を放り捨てる。理由は簡単だ。もう魔剣を持つだけの筋力すらも危ういんだよ……。

そして、これを挑発に使う。こっぴうタイプに効く言葉を俺は知っている。そうすりゃ真っ向から顔真っ赤になって向かってくるだろう。

「所詮女だ。戦うことに向いてねえんだよ」

「なんですって?!」

ミハエルの後ろで観戦している聖竜騎士団は猛り狂ってる。超怖い。

けど、ミハエルはそこまで気にしていないよう。静かな口調で「そうかもしれないね」と呟くだけだ。

「聞きます。武器なしで貴方は私に勝てるんですね？」

「当然だ」

「わかりました」

行きます、とだけ言うとミハエルはパターンを変えずに腹を突い

てきた。穂先に遠心力を最高に効かせたフックをぶち込んで吹き飛ばす。

そして 俺より身長の高いはずのミハエルを見上げるほどに深く踏み込んだ。

「終わらせてやる」

得意技の右アッパーを振り上げた！

が、途中で障壁があり、俺の拳は届かない。

電流が走っているような防壁。俺は知っている。これはとても単純な【<sup>バリヤー</sup>防壁決壊】だ。

間の抜けた顔になっているだろう。クスリ、とミハエルは笑ったんだ。

「終わらせましょう」

パイクの穂先は俺の腹を貫いて、地面に突き刺さった。

腹を見る。見事に内臓がいつちまってる。

終わりたくねえ。諦めたくねえ。けど

「ガッ」

喀血する。

パイクを力任せに引き抜かれ、俺は 倒れ伏した。

身体感覚がもうない。

「先輩！勝ちましたよ！」

と喜ぶ声が聞こえ

「よくやった！」

と称える声が聞こえてくる。

畜生 畜生！くそつたれ！

俺はこんなところで倒れる前に来たんじゃないやねえ。

「まだだ……まだ俺は終わっちゃいねえ」

背後にある魔剣に手を伸ばす。

ガクガク震える身体を魔剣を支えにして立ち上がる。

産まれたての小鹿のように立つ俺を不思議そうな眼で見る女たち。  
ああ、俺だつて何で立ったのかわかんねえ。

勝てるはずもねえ。どう考えたって負ける。これまでの俺の経験からしてここから逆転できる可能性はゼロだ。逃げれる可能性だつてない。

それなのに一歩、一歩、踏みしめるように俺は歩く。

「まだ やるのですか？」

ミハエルは俺に振り返り、真面目な顔でそう言うんだ。

正直やりたくねえよ。

けど、倒れたまま終わるのだけは頂けない。

倒れるなら前のめりだ。

「これで最後です」

トドメの一撃を これで死ぬという必殺を俺は目を開けてきつちり見届けようとした。

だが、それが俺に届くことはなく 攻撃は突如現れた何者かによって防がれていた。

片手に魔杖を持ち、漆黒のローブを優雅に纏う 陽光に照らされたまるで金糸のような髪をたなびかせている少年。

「なんだ。まだ秘湯についてはいなかったのか。転移するには早すぎたようだな」

余裕綽々の冷たい声。

小さな時から共に励み、鍛え合った相棒。

聖竜騎士団の女たちも驚いている。そりゃそうだ。俺も驚いているんだからな。どういうことかさっぱりわかんねえ。

けど、心強いことこの上ねえぜ。

「良いタイミングだったようだな。お前もボロボロみたいだし、後は俺に任せておけ」

「任せませ。デルブライト」

空気が変わる。

デルブライトの発する濃厚な魔力が世界を書き換えていくのがわかる。膨大な魔力は暴力だ。感覚器官から侵入し、恐怖という名の感情を湧き立たせる。

圧倒的な魔力量の差は覆しようのない才能を見せつけられることに似ている。

目の前にいる聖竜騎士団どもは怯えている。たった一人の魔法使いに。

「どうせ手負いのカシムに勝つただけなんだろう？」

トン、と魔杖で地面を叩く。

「お前ら如きでコイツに勝てるはずがない。俺に勝てないのと同様にな」

地面が裂ける豪快な音とともに、大隆起が起こる。天に向かって大地の柱が乱立する。女たちに当たらないように絶妙に操作されたソレは威嚇。力の誇示。差を見せつけるためだけの無駄な行為。

デルブライトは怒っているみたいだ。いつもならこんなことをしない。あっさりと倒すことを好むから。

「お前らに教えてやろう。カシムは俺よりも強い。今日負けたばかりだから、認めたくはないがコイツは俺より強い」

空に吹き飛ばされた女たちは飛行していた各々の聖竜に受け止めてもらったみたいだ。

背に乗りデルブライトと俺を見降ろしている。ミハエルやアレイも空にいる。

そいつらを見る　睨みつけているデルブライト。

「俺より強いはずなのに、俺より弱いお前らに負けたことを俺は許せない」

大空に手をかざす。

突然青空なのにも関わらず稲光が迸り、致命的な熱量を持った雷が落ちる。

女たちには当たらず、地面から生えた木々を突き破って地面に突き刺さった。地面が爆ぜる轟音に、物理的な衝撃風。

デルブライトの強さはいつも意識したことがないが、弱っているときだとこれほどまでに頼もしいものなのか、と再確認してしまう。何度も中規模の戦略魔法を使っているにも関わらず、息切れ一つしない。こういうのを

「化け物め」

女たちが代弁してくれた。

正しく化け物だろう。よく勝てたな、と安堵の吐息が漏れる。

「俺が化け物だと？馬鹿を言うな。俺が強いんじゃない。お前らが弱すぎるだけだ」

「好き放題言わないでください！」

真っ向から反論したのはミハエルただ一人。

他の女たちは怯えている。デルブライトの力に圧倒されている。

「一斉にかかるよー！」

アレイが号令した。

聖竜に乗った女たちが大きな声で返事をする。

考えてみる。

自分がかもし無傷の状態です。万全の状態ならアイツらの特攻は恐ろしいか？

答えはすぐに出る。全く問題ない。

避けながらカウンター気味に小突くだけで大怪我をしてくれるのだからむしろ楽なのではないだろうか。

デルブライトも俺と考えは同じのようであらざるを得ない。

お、っと今気付いたかのように俺に振り返る。

「ほれ」

そう言って投げ渡してきたものは回復薬。エリクサーほどまではないが、それより一つ下のエクスポーションだ。これもなかなかの高級品。

使え、と目で言っているので使うことにする。傷がみるみる塞がっていく、体力が増していくのがわかる。

「一斉にかかるとはどういうことですか！」

手をニギニギさせている間、アレイとミハエルは揉めていた。

困って戸惑う聖竜騎士団。団体行動向いてなさそうだな。

「勝てない。アイツには勝てないんだよっ！」

「先輩」

裏切られた、と言わんばかりのミハエルの落胆の声。茫然自失というやつだ。

最強と信じていた騎士団が最強ではなかった。これはかなりのショックなのかもしれない。

何かに縋っている時点で弱い、と思ってしまう俺からすればわからない感情だけだな。

「もついい！後ろで見ていなさい！イクよっ！」

「待って」

空から飛来する聖竜。

神話の世界のような神々しさすら感じる闘気を感じる。

が、魔王すら倒した俺たちに敵うはずもない。

ただの杖の一振り。

その一振りだけで巻き起こったのは暴力などというぬるいものではない。災厄　と呼べるものだ。

突如現れた漆黒の繭のようなものが聖竜たちが突撃してきた場所を覆い隠し、そのまま飲み込んだ。

「知っているか？魔界というものはいつでも門戸を広く開けている」

くつくつとデルブライトは笑っている。

なるほど、思い出した。俺のつけている胸当てが声なき声で叫んでいる。ここから先は地獄。魔界の門番は　ケルベロスだ。

三年前だったか。ケルベロスの毛皮が高く売れた時代、俺とデルブライトは必死に狩猟しまくった。この漆黒の繭を通り抜けてな。

「先輩？」

空に浮かぶのは取り残された一人の少女。

やたらと露出度の高い白銀の鎧をしているミハエルだけだ。

愛竜であるシュリファに乗って、見下ろしている。

俺たちではなく、先輩とやらを飲み込んだ繭のことを。

「何をした？」

静かな声でそう問うてくる。

「言っただろう？魔界への旅に招待した。こんな機会なかなかないだろう？」

小馬鹿にしたような笑みをデルブライトが浮かべている。

「先輩たちを離せ」

面白くなってきた、とデルブライトがこっそり呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

もとより殺す気などないはずだ。殺す気ならさっさと殺しているだろう。イジメているんだ。相変わらずだな。

「嫌だと言ったら？」

ミハエルはデルブライトを睨んで言った。

「無理やりにも返してもらいます」

覚悟を決めた表情。

やる気満々ってか。

でもよ そいつは許せねえ。

俺は立ち上がり、デルブライトを押しやってミハエルを見た。そして、言っちゃった。

「そいつは無理だな」

無理に決まってる。

だって俺がいるんだから。

回復薬で多少なりとも回復した俺が      リベンジしないわけない  
だろうが。

「どいてください。貴方に用はありません！」

気に入らねえ。

俺に興味がないっていうその視線がムカついてたまらねえ。

一応最強の戦士なんだよ。負けたままで済ませるわけにはいかね  
えんだよ。

「お前に一度負けちまった。確かに俺は重傷だったけど、負けたっ  
て事実が変わらねえ。それが俺には我慢ならねえんだよ」

「そんなこと」

デルブライトを見る。

苦笑。仕方ないな。目だけでの会話。

「お前には悪いけど      付き合ってもらっぜ。いいだろ？」

相手は竜を駆る女騎士。

俺は若干体力が回復した戦士。

魔剣を手に取り      構える。

軽い。重さを全く感じねえ。

「俺の強さを証明するため、お前は無様に倒される」

「私は負けない。突然現れた魔法使いにやられただなんて信じない」

敵は急降下し、俺は飛翔する。

『覚醒しろ』

「シユリフア！」

俺の使う魔獣の胸当ては覚醒し、俺の身体を覆い尽くす。

先程まで辛かったこの過程が今は何ら痛くない。体力があるって  
素晴らしい！

降下しながら竜が撃ってきた【火炎の息吹】ファイアブレスも全く怖くない。

避けることも、防御することもせず、無視する。

漲る力に歓喜する。

魔剣を見る。

赤く明滅するその姿はまさに魔剣。

俺の【闘気】オーラをどんどん吸い取り、禍々しい魔力に変換していく。  
そういえば、ブルツシユリウムで全力の状態でコイツを使うのは  
コレが初めてなのかもしれないな。

「貴方には一度勝ちました。負けるはずがありませんッ！」

何の理由にもなりはしねえ。

俺が負ける理由にはなりはしねえんだ。

彼我の距離は手が届くほど。

敵も俺も止まることなどできるはずもなく

「俺の」

「私の」

魔剣と名槍は振り上げられ

「勝ちだアアア！」  
「勝ちですツツツ！」

男と女の意地の張り合いはここに完結した。

ドサリ、と地面に落ちたのはミハエルのほう。  
槍は叩き折られ、衝撃で身体が痺れたのか、地面で痙攣している。  
その前に立ちふさがり、身を呈して守っているシュリファなる聖  
竜。

「別に取って喰ったりはしねえよ」

俺としては殺す気なんてないしな。

「デル どうする。お前だって殺す気ないだろ？」  
「そんな寝覚めの悪くなることするはずがないだろう？女というのは愛でるものだ」

言うなり、漆黒の繭は崩れ去り、女たちは落ちてくる。  
地面に積み重なっていく女というのはなかなかシユールな光景だ  
った。

全員死ぬ一歩手前のような状況で、虫の息なんてものじゃない。  
放っておいてもしばらくは死なないだろうが、それでも一日経て  
ば逝くのではないだろうか。

まあ、そこまで責任は持てない。興味もないしな。

興味があるのは違うこと。

「ところでデル。聞きたいことがある」

このまま聞いたらダメな気もするが、はっきりさせておきたいことがある。

なんだ、と答えるデルブライトの頬に流れる汗を俺は見逃しはしない。

「この【魔剣カイゼル・フォルヴァー】の能力。聞くの忘れてただろ？詳しく教えてもらおうと思ってな」

「後で」

「今すぐにだ！」

「……」

どもり、きよどり、ため息。諦めたようだ。

確実に予想通りだろうな……。

「能力は三つある。一つは持ち主の手元に召喚できること。一つは闘気を効率よく収束してくれること」

「最後は？」

「持ち主を魔剣のある場所に召喚できる」

「……」

「……」

言葉が出ねえ。

コイツ 俺に魔剣渡したけどよ。契約はさせてなかったわけか。恐ろしい奴だなっ！

「あ、でも、ほら。あれだろう？一度しか使えないんだ。持ち主を

魔剣のところに運ぶのは。条件が契約を解除することだからな。だから、今は持ち主不在だろう？そして、お前が持っている。先程の過程を見る限り、既にその魔剣はお前を主だと認めているぞ」

そう言えばこんな奴だったよ。空を見上げてこみ上げてくる大粒の汗を俺はグッと我慢する。

「すみません。口論しているところ悪いのですが」

追撃の舌撃を緩めるつもりはなかったが、ミハエルの声が聞こえたので仕方なくやめた。

「何だ？」

「私は負けたんですか？」

「客観的に見てお前が勝ったように見えるのか？」

「いえ　そうか。負けたんですか」

精気が抜けたような顔になる。

チラリ、と女たちが居る方向を見て安堵するも、絶望のほつが濃いらしい。負けたの初めてなのか？

「聞かせて下さい。なんでこんなところにいるんですか？」

「お前らのしようとしていることはわかっているんだよ！どっせ風呂覗きだろう?!」

横から聞こえた声。アレイのものだ。

震えながら立ち上がり、顔を真っ赤にして叫んでいる。

「当然のパーペキよ」

否定の余地もない。

俺はそのためだけにきた。

もう目の前にブルツシユリウムの秘湯。

残る障害はあと一つ。

だが、それすらも問題ではない。

「お前らは何故そこまでして風呂覗きをしようとする。何故だ?! 名誉もあるだろう。地位もあるだろう。唯一の【魔王殺し】よ。何故そんなくだらないことをしようとする」

「風呂覗きのためにそこまで頑張っていたんですか?!」

ミハエルが驚きの声をあげる。

最低ね。最低すぎる、という言葉が聞こえてくる。関係ねえんだよ。

「一度決めた。覗くと決めた。ただ、それだけのことなんだよ」

「理由としては十分すぎるな」

デルブライトだけだ。わかってくれるのは。

わて、と。

「お前らは俺とデルに負けたわけだ。というわけで、もらっていくぜ」

最後の障害は恐ろしいほど深い掘り。

魔法で飛ぶことができないようになっていたとの情報がある。

ワイバーンあたりを捕まえて飛び乗って行こうかと思っていたが、目の前に竜がいるんだ。使わない手はない。

「シユリファは渡さない!」

「サラマンダーは渡さないぞ！」

チラリとデルを見る。

ああ、と頷く。

奪うものは決まった。

「欲しいモノは奪う」

「奪われたくなければ力をつける。抵抗しろ」

この日、俺とデルは初めてドラゴンライダーとなった。

「泥棒　　ッ！」

3 - 4 再戦（後書き）

次で最後ー！

### 3 - 5 欲望のままに

俺は自慢じゃないけれどとても目がいい。

目を凝らせば3kmほどまでなら視認できる。

ゆえに、俺に反抗しようとするシュリファなる聖竜を無理やり操縦しながらブルツシュリウムの秘湯の周囲にある底が見えないほど深い掘りの上で目を凝らして中を覗こうとしていた。

外壁はとてつもなく高いが、天井がない部分があり、露天風呂となっていることがわかる。が、人っ子一人いない。

何かがおかしい。デルを見ると同じ意見のようだ。

「どうする？」

問いかけてくる。

が、そんなこと聞くまでもないだろ？

「行くしかねえだろ」

空駆ける王者を従えている。

秘湯の周囲には防壁などもなさそうだ。あるとしてもそれならデルブライトがとつくに気づいているはず。

目配せをする。ついてこい、と。

シュリファのケツを思いっきり引っぱたいて俺は突進する。

迎え撃ってくるかのような風の抵抗は加速していき、耳の中を侵略してくるかのような不愉快な風切り音が周囲を漂う。

風切り音を聞きながら、今日一日のことを思い出す。

親友と喧嘩して、魔獣ぶつ殺して、魔女に女にさせられて、女騎士に殺されかけて、親友に救われて、んで再戦して勝つて 要約すればこれだけのことだ。

たったこれだけのことなのに、とても苦勞をしたと思う。  
どんどんと秘湯が近くに見えてくる。

外壁は30mを超えるほどに超大だが、空を飛ぶ俺たちには関係ないこと。

「デル！」

つい、声が出る。

「何だ?!」

「お前は不可能って言ったよなア?!」

「そんなことを言った覚えがある！」

「どうだ、不可能だったか?!」

「いいや、可能だった」

「だろ?!」

テンションが上がる。

ここまで来て、達成感に包まれてくる。

俺はやれたんだ。あと少しだ。まだ秘湯に美女は見えないが、きつといるはずなんだ。

俺は　俺はッ!

「俺に不可能なんてねえんだよッ！」

シュリファが嘶く。

とても悔しそうに、俺に従うのが苦痛なのか、とてつもなく悲哀の籠った声だった。

デルブライトが操るサラマンダーも呻いている。

俺もデルブライトも博愛精神など皆無なので、無理やり操作し、地面に降り立った。

降り立ったところは露天風呂がいくつもあるところだった。若返りの湯、婚約祈願の湯、伯方の湯、などいろいろと書かれている。

名も知らぬ綺麗な石板が敷き詰められた高級感溢れる様相。風呂も一つ一つが大きく、泳ぐことすらできそうだ。

広さでいえばカシムの住まう家が何個入るのか考えなければならぬもの。

デルブライトと一緒に観察していると、聖竜は不意に飛び去って行った。

帰り道どうするか、と少し考えるが、そんなことは忘却の彼方。どうでもいい。

そろそろここに女たちが来るに違いない。まだ太陽が上がっている。夜になればきつと来る、と俺は信じていた。

どこに隠れようか、と考えていると

「ほ、本当に来たんだね。カシム。凄いよ。そこまで必死に覗きかけたの？」

聞き覚えのある声が秘湯とつながった場所にある旅館の扉から聞こえた。

旅館 極東にある木造りの風情な大きな館。何度か見たことがあるが、これほどまで巨大なものを見たことがない。

秘湯と旅館を繋ぐ扉から ミオがいた。

いつも通りのロープ姿。だが、いつもと違うことがある。何かを諦めたかのような表情。

どうということだ？

「ミオ なんでここに」

デルブライトのほうを見る。何も知らないぞ、と首を振っている。

混乱する。何がどうなっているんだ。

ミオがパチン、と指を鳴らした。

すると、俺とデルブライトの周囲に突然壁が出来る。

【白の極壁】ホワイトガーデン。神聖魔法の高位の奇跡。何もかもを通さない絶対的な壁。魔法も物理攻撃も全て跳ね返す。使い手はほとんどいない。

上を見る。

宙に浮かんで俺とデルブライトを見降ろしている奴がいた。

「やあ、本当に来るとは思ってなかったよ。いやね？一応さ。いろいろと情報は来ていたんだよ。でね。私としてもカシムとデルの邪魔をしたくないんだよ？裸見られることくらい気にしないし」  
「じゃあ見せるー！」

心からの叫び。

デルブライトも同様に叫んでいた。頼むから俺たちに秘境を見せてくれ、と。

「でもね。うん、そうはいかないんだ」

可愛らしい顔に嗜虐的な微笑み。

な、何する気なんだよ。

恐ろしさのあまり発狂しそうになる。

魔剣を取り出して【白の極壁】ホワイトウォールに渾身の一撃を放つ。

当たった瞬間全ての衝撃を飲み込んでいるのか、全く手ごたえを感じない。

無駄なのだと悟った。

デルブライトも同様に苛烈な魔法を放っているが、全て無効化されている。

もう 終わりか。

「せめて終わるまで寝ててよ。あとでたっぷり説教してあげるから」

そう言っ<sup>スリープ</sup>てリーフは詠唱を始める。

【睡眠】の魔法。

こんな密閉空間で喰らったらひとたまりもない。

詠唱が終わり、俺とデルブライトの周囲に薄紅色の霧が取り巻く。

「くそっ 何がどうなってんだ」

「情報屋に裏切られたというところだろうな」

「こんなところで あと一歩じゃねえか」

「負ける んだろうな」

そんなふう<sup>スリープ</sup>に諦めを享受しようとしていた。

ミオは俺に対して憐憫の眼差し。

同情でもしてくれてんのか？

が、不意にミオの身体が突き出される。

「あ、ちよつと まだッ！」

押し出されるように小さな身体は突き出され、その後ろからはイラストで見た女体をタオルだけで包んだ美女たちの姿があった。

どうやらこの事態は美女たちには知らされていなかったらしい。

エルフ、天使、魔族、ドワーフ、獣人、ありとあらゆるジャンルのいろんな属性の女たちが姿を現した。

幼女もいる。美女もいる。可愛い女もいる。

これは ！

力が湧いた。

「な、なんなのこれは」

「聞いてないわよっ！」

「なんで男がこんなところにいるんですかっ？」

「責任者アアアツ！」

阿鼻叫喚の悲鳴。

女たちが嬌声を上げる。

いやはや、凄まじい蔑視を感じるが、そんなことはどうでもいい。タオルだけが障害だ。

後一つ 障害はそれだけなんだよ。

「……………デル」

「……………カシム」

互いに目を合わせる。

そして、魔剣と魔杖に全ての力を込め始める。後先考えてられるもんじゃない。

こんなリーフ一人の魔法に立ち塞がられて諦める俺たちじゃない。

「おおおおおおオオオツツツ！」

「はああああアアアツツツ！」

【睡眠<sup>スリープ</sup>】の靄は霧散する。

俺とデルの闘気と魔力が混じりあい、物質的に顕現し、周囲を汚染していく。

俺の闘気は血のように赤く、デルブライトの魔力は闇のように暗かった。

混じりあい、赤黒い色の波が【白の極壁<sup>ホワイトガーデン</sup>】の中で充満する。穢れ、澱み、崩壊する。

「カシムツ！君はそれでいいのかい？！裸が見ればいいのかい？！」

「さ、さすがに私もそこまで必死な姿は引くよ……」

ミオとリーフが冷や汗流してそう言うんだ。

けどよ。

関係ねえよ。

「デル！これは」

「この力の脈動は」

世界は赤黒く染めあがり

「俺と」

「お前の」

男はただただ前へと進み

「欲望だアアアア！」

壁はすんなり破壊された。

暴風が巻き起こる。

ブルツシュリウムの秘湯は。

## 終章

「へ、へへ、こんなのもたまにはいいもんなのかもしれないねえなあ」  
「ねーよ」

城皆都市ラスベルグの地下には存在しないはずの場所がある。  
危険度Aクラス以上の罪人が収容される 牢獄だ。

そこで俺とデルは両手を鎖に繋がれて、壁に繋がれていた。

あの事件の後、力を使い果たして俺とデルブライトは意識を失った。

気づけばこんなところで罪人の扱い。不服でしかない。  
状況は理解できるが でもなあ。

「結局、見れなかったのか。デル お前は見れたか？」

「かすかに翻ったタオルの隙間から太股は見えた。が、陰というのは恐ろしいものだ。肝心なものは常に闇の中だ」

「そうか」

考える。

俺のしたことは間違っていたのか、と。

繋がれて三日経ち、その間ずっと考えていた。

俺は間違っていない、と思う。

間違っているのは俺のような良い男を放っておく女たちだ。何故街頭では仲良くしている男女が多いんだ。何故俺に来ない。俺の方が強い。俺の方が格好良い。俺の方が金がある。

何が劣っていると言うんだ ?

「だから、言っただろう。カシム。世の中の女は見る目がないんだ」  
「よ」

デルブライトはそう言う。

「だから、言っただろう。カシム。俺と一緒に魔族の女の子を召喚しよう、と。そして契約をするんだ。あいつらは契約した主を裏切らない」

それもいいのかもしれない、と考えてしまう。  
でも、それでも。

「人間の女の子とイチャつきたい　って考えはダメなのかなあ」  
涙が出る。

「俺　頑張ったんだ。裸を覗くためだけに、その前には健気に頑張ったんだ」

思い出すだけで号泣しそうだ。  
仲良くなるために女の子が好きそうな話題を勉強したことだってある。服装だつて気にした。髪型だつて。  
強くない男は嫌い、って言われて最強の戦士になった。  
金のない男に興味はない、って言われて金持ちになった。  
ダサイ男は論外、と言われて一応格好良くなつた　はずだよな？  
それなのに、何故俺は報われない。  
想いは伝わらず、柄にもなく弱気になる。

「誰も俺を見てくれない。楽しそうに笑っている。俺を見て　きつと見下している奴だっているかもしれない。この童貞ってな。そうさ。抱いたことなんてない。キスだつてない。諦めたくないけど、

どこかで諦めてしまった俺もいる」

だから、覗こうとしたんだろう？

つい、自虐が心の中に浮かぶ。

表情はきつと 嘲笑。自分を嗤っているんだ。

「けど、覗くことすら無理だった。俺はどうすればいい」

「どうもしないだろ」

デルブライトは俺を見て、言った。

「諦めるな。諦めたら先はない。陳腐な言葉だが、頑張れ。それしかないだろう。今まで俺やお前は運がなかった。縁がなかった。それだけのことだろう？」

そう言うデルブライトはとても格好良く見えた。

まだ、チャンスはあるのかな。

「あるだろう。諦めない限り、ずっとな」

牢獄の中で見上げられるのは苔の生えた暗い天井。

だが、デルブライトの言葉で天井から先にある空が見えた気がした。

太陽が見たい、と急に思った。

「外、出るか」

俺の装備は全て剥ぎ取られ、デルブライトの装備も全て剥ぎ取られている。

それでも、この程度の鎖なら問題ない。

力を込めて腕を振る。それだけで鎖は引き千切れる。

「相変わらずの馬鹿力だな」

デルブライトは呆れている。ついでにコイツの鎖も千切ってやり、自由になった身体で屈伸をする。

「さて、外に出てどうするんだ？俺たちは罪人だぞ？」

「別に。どうもしないだろ。俺たちに勝てる奴がいんのか？」

いないな、とお互いに笑う。

「魔剣よ。来い」

「魔杖よ。来い」

お互いに武器を呼び寄せて、牢を破壊して廊下に出る。

看守がこちらを見て驚いている。仲間を呼んでいるのか。どんどんと床を踏みしめる鉄底の靴を履いているであろう足音が聞こえる。見えてくるのは完全武装の重装兵。手には剣を持ち、やる気満々だ。

「さて、喧嘩をしようか。喧嘩をよおッ！」

「やるなら派手に。とことん愉快にやろうか」

細道にひしめく人波は俺たちの邪魔をしようとするが、突破できる。

簡単だ。

俺とデルブライトがいるんだぜ？

「いくぜっ！」

「あぁ  
」

こつして今日も

俺は健気に生きていく。

完

## 終章（後書き）

ども、作者のビビです。

いやはや、なんとか書き終えました。

一応これのテーマですが、財宝を求めて命懸けで戦う男とかは賛美されるが、女体を求めて命懸けで戦う男はどうなんだろう、と思った試験的な作品です。

主人公は　まあ見てくれた人はわかりますが、熱く、馬鹿で、童貞です。

そんな彼の物語いかがでしたでしょうか。

私としては結構楽しんで書けたので結構満足しています。

まだまだ技術的に足りない点があるので、これから三人称視点で改稿していきますが、よろしければそちらもお付き合いください。

<http://ncode.syosetu.com/n0920j/>

こちらです〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3424i/>

---

”え”から始まる物語

2010年10月9日19時08分発行